
流星のロックマン ～忘れ去られたモノ達～

天馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 〜忘れ去られたモノ達〜

【Nコード】

N1141V

【作者名】

天馬

【あらすじ】

メテオG破壊から数ヶ月後の秋。

スバルたちの住む町の木々は夕日の色に染まってる。

平和な日々が続いているそんな最中、ある場所で何かが動き始める。人々の記憶から消え去ってしまった存在「妖怪」。

信仰することを観光ということでされている「三貴神・八百万の神々」。

忘れ去られた彼らの物語など、今の人々は知らない。

そして、物語は深さを増し、いろいろなものを巻き込んでいく！

人物目録（前書き）

ウォーロック：この本なんだ？

スバル：かなり古い本だね。

ウォーロック：何が書かれているんだろっな。

スバル：開いてみようよか。

ウォーロック：そうだな。

ペラペラ・・・・・・・・

人物目録

主な登場人物

星河スバル

本作主人公の少年。

宇宙と機械いじりが好きな、小学5年生。

ウィザードのウォーロックと、いつも一緒にいる。

過去3度にわたって、地球を未曾有の危機から救ってきたヒーロー

「ロックマン」の正体だ。

トランスコードは003、掛け声はシューティングスター。

ウォーロック

スバルのハンターに居候中のFM星育ちのAM星人。

今はスバルとともに過ごしている。

喧嘩っ早く、争いごとであれば何でも突っ込む。

響ミソラ

本作のもう一人のヒロイン的な女の子。

歌をこよなく愛し、そしてなによりスバルのことが好きな乙女。

意外と天然な部分もある、大人気国民的アイドルだ。

ウィザードのハープと電波変換して、ハープ・ノートになることが出来る。

トランスコードは004。

ハープ

ミソラの元で一緒にすんでいる琴座のFM星人。

お気楽な性格をしている。

ときよりウォーロックをからかったりする。

ミソラの仕事の手伝いもしている。

白金ルナ

コダマタウンにあるマンションにすんでいるお嬢様っ子。

スバル・ゴンタ・キザマロと一緒にいる。

チーム「ルナルナ団」のリーダーだ。

「スバルじゃなくロックマンのことが好きだ」と言い張っているが、
実はスバルのことが好きなツンデレもちの乙女。

ウィザードはモード。

モード

ルナのウィザード。

おしやれに関する情報に詳しい。

ルナがスバルと結ばれることを、さりげなく応援している。

牛島ゴンタ

頭の中は食べ物のことばかりの太った少年。

牛丼が大好物。

ルナルナ団の中で唯一の力持ち。

ウィザードのオックスと電波変換し、オックス・ファイアになるこ
とが出来る。

トランスコードは005。

オックス

ブルルル！が口癖の牡牛座のFM星人。

よくゴンタと牛丼で喧嘩になるとか。

炎を吐くことができる。

キザマロ

ルナルナ団一の情報屋。

頭が良いが、身長で悩み中。

ウィザードはペディア。
情報屋コンビだ。

ペディア
キザマロのウィザード。
何でも知ってる。

喋り方が僕っ子だったり・・・。

暁シドウ

サテラポリスのエース。

好物はうまい棒という変わった人。

ウィザードは、サテラポリスが極秘で創った、人工電波生命体アシッド。

アシッドと電波変換して、アシッド・エースになることが可能だ。
普段は割とふざけているが、いざとなると真面目になる。

トランスコードは001。

アシッド

暁シドウのウィザード。

冷静な性格をしていながら、どこか抜けている部分がある。
的確な指示で回りに人を動かすことが出来る。

ウォーロックとは「喧嘩するほど仲が良い」仲だ。

星河大吾

スバルの父親。

スバルが小学2人の頃に宇宙ステーションで事故に会う。

それから、数年たったメテオGの事件で地球へ帰還。

それ以降は、妻のアカネと息子のスバルと平和に過ごしている。

星河アカネ

スバルの母親。

いつも側でスバルを支えている大切な人。

大吾が帰ってきて、ホッとしている。

ヨイリー博士

サテラポリスの科学部の統括者。

身長は低めな、おばあちゃん。

誰にでも「ちゃん」とつける特徴的なお方。

ウォーロックはこの呼び方が、嫌らしい。

アシッドと今は亡きジョーカーを作った本人。

クインティア

メテオG事件に関わったジャックのお姉さん。

今はサテラポリスで手伝いをしながら、暮らしている。

実は暁のことが好きだったりと、もちろん乙女。

性格は大人しめ、だが怒ると怖い。

再構成されたヴァルゴと電波変換して、クイン・ヴァルゴになる

ことが可能。

トランスコードは021。（ だと思う ）

ヴァルゴ

元FM星の凶悪犯罪者、現クインティアのウィザード。

暁達に再構成された。

性格はほとんど変わっていないが、色々突かれて、裏切りなどが出来ないようだ。

モチーフは乙女座。

ジャック

メテオG事件に関わった、元スバルのクラスメイトでクインティアの弟。

今はクインティアとともに、サテラポリスで手伝いをしながら、暮らしている。

若干ツンデレもち（？）。

実は賢く、委員長に引けをとらない。

再構成されたコーヴアスと電波変換して、ジャック・コーヴアスになることが可能。

トランスコードは022。（ だと思う ）

コーヴアス

ヴァルゴとともに色んな星を滅ぼしてきた凶悪犯罪者、現ジャックのウィザード。

暁達に、ヴァルゴと共に再構成された。

ヴァルゴ同様、性格はほとんど変わってない。

もちろん、色々突かれて、裏切りなどが出来なくなっている。

ウォーロックによく喧嘩を売ったりしているとか。

モチーフは烏座。

尾上十郎

コダマ小学校の屋上で庭師をしている植木職人。

子供が大嫌いらしい。

ある日出合ったウルフと一緒に暮らしている。

ウルフと電波変換して、ウルフ・フォレストになることが可能。

ウルフ

狼座のFM星人。

十郎と一緒にボクシングの練習などをしながら気ままに暮らしている。

丸いものに反応して、暴走することがシバシバ…。

鉄見千代吉

小学3年生の男の子。
意外と、喧嘩っ早い。

ウィザードのキャンサーと電波変換することによって、キャンサー・バブルになることが可能。

キャンサー

蟹座のFM星人。

千代吉とともにいる。

身長は小さい。

双葉ツカサ（ヒカル）

多重人格者の子。

過去、スバルと戦ったこともあり、もう1つの人格ヒカルを抑える為に手伝ってもらったりしている仲。

割と大人しめの性格をしている。

それに対し、ヒカルは暴れん坊。

すぐ怒ったりする。

ウィザードのジェミニと電波変換して、ジェミニ・スパークになることが可能。

ジェミニ

双子座のFM星人。

ツカサ（ヒカル）と共に気楽に過ごしている。

結構賢かったりする。

主な登場人物に関しては

ゆっくり更新していきます。

オリジナルキャラ（随時更新）

よくよくてんが

翼妖天牙（初：それは事の前触れか）

コダマ小学校6年の女の子。

スバルの隣の家にすんでいる。

何かとめんどくさがり屋で、勉強から何でもかんでも色々めんどくさがる。

なのに、実は真面目で掃除なんかは丁寧になす。

ウィザードはフェザー、鴉（または烏）天狗モチーフの電波生命体。

フェザーと電波変換することによって、フェザー・コーヴァスとなる。

何かと秘密を抱えている。

フェザー

天牙のウィザード。モチーフは鴉（または烏）天狗。

形が烏のため、回りからは「喋る烏」としか受け入れられていなかったり。

性別は男、性格は真面目で礼儀正しい。

時として厳しいときもありはするが、彼なりの注意の仕方。

天牙が幼い頃から、一緒にいる。

フェザー・コーヴァス（初：風を吹かせる妖怪）

赤い顔に長い鼻、背中には黒い烏の大きな翼が二枚、耳はエルフ耳（尖がり耳）、髪の色は黒。

そして、頭には小さなときんを被り、和を象徴している服を着た、鴉（または烏）天狗モチーフの電波体。

その正体は、翼妖天牙がウィザードのフェザーと電波変換した姿。現在の進行状況では、スバルたちにまだ正体はばれていない。

その強さとスピードで、ロックマンたちを圧倒した実力は本物だ。烏を出して操ったり、風を操ったりできる。

由璃（初：校門前で）

本名、篠河由璃。

天牙とは小学3年からの友達で、同級・同じクラスの小学6年生。おっとりした性格で、優しい。

かなり大人な雰囲気をかましている。

ルナの住むマンションにすんでいる。

大天狗（初：地底にある古きモノ達）

フェザー・コーヴァスに何かと命令を出している天狗。

天狗の中では最上位の位くらいにつく妖怪。

その容態は、まさに天狗そのもの。

身長と背中の翼はフェザー・コーヴァスよりも大きい。

お酒を飲むと、口調が変わったりする。

鬼（初：彼らの楽しみ）

大天狗とは大昔からの親友。

頭には鬼の象徴とも言えよう、角が二本はえている。

大のお酒好きで、10分で一本は普通に飲み干せる。

初登場の回では、男の鬼しかいないが、女の鬼もいる…らしい。

八百万の神々

各地の神社で崇められている神様のこと。

現時点では、詳しいことはまだ不明。

ただ、さまざまな妖怪を仕えているようだ。

人物目録（後書き）

途中からグダグダになったり、文章が短くなったりしていますが、ご了承ください。

オリキャラの名前の隣の（ ）は初登場の回を示しています。

秋空の朝（前書き）

では、物語の始まりです。

メテオG破壊から数ヶ月後のコダマタウン。

スバル君たちの平和な日常が書かれています。

pixivで見た方もいらっしやるでしょうが、

かなり内容を変えていきますので注意です。

秋空の朝

秋の風が吹いている朝。

彼は、相棒の大声によって起こされた。

《おい！起きろ！委員長たち来るぞ！》

早く起きるように促すその怒鳴り声。

彼はうなりながらも、体を起こす。

「ううゝ、起きるってば。」

《あんまり遅いと、あいつ怒るからしらねーぞ。》

「分かってるってば。」

そう言つて、パジャマから普段着へ着替え始める。

タンスから普段着を出し、着替え初めて数分後。

下の階から、母親の声が聞こえてくる。

「スバルゝ、ご飯できてるわよ。」

「分かってるゝ、今行くよ。」

そう言つて着替え終わったスバルは、一階へつながっている階段を勢いよく駆け下りていく。

家にはいつもの音が響きわたっている。

バタバタバタ！っと言う音とともに、スバルは階段を降りおえ一階の床に降り立つ。

そうして、急ぎ足でリビングへ行き、父親―大吾の前の椅子にすわり、朝食を食べ始める。

「そっぴやスバル、お隣に誰か引ッ越してきてたんだな。」

「ふえ？そっだつたッけ。」

口にモノを運びながら、スバルは大吾の発言に答える。

そんな姿に少々汗を流しながら笑っている、あかねと大吾。

大吾はそんなスバルを気にしながら、話そっと思っっていることゝ続きを話し始める。

「あぁ、たしか翼妖ッて苗字の人だ。」

「よくよう？」

「小学6年生の娘さんがいるらしい。今度挨拶しなきゃいけないな。」

などと話しているところに、玄関のチャイムが鳴る。

いつものメンバーが、スバルを迎えに來たのだ。

その証拠に玄関からは「星河くーん！」という、彼女の聲が聞こえていた。

スバルはその聲に反応し、朝ごはんに出されているおにぎりとお茶を口に大急ぎで運び、玄関へ荷物を持って走った。

「ごめん！朝ごはん食べてた。」

そう言いながら、スバルは玄関のドアを開ける。

目の前には、黄色い髪をしいつもめ彼女と、いつもめ彼らがいつ

ものように立っていた。

「おせーぞ、スバル。」

「まあ、ゴンタ君より早いので大丈夫ですが。」

「そんな事言ってる暇はないわ、さあ早く行かなきゃ遅刻しちゃうわよ！」

そう言つて、学校向けて走り始める4人。

スバルは食べたばかり、走ってる最中は少々気分を悪そうにしていた。

結局、走った努力は無駄になってしまった。

余裕に朝の会に間に合った4人の顔には、汗が流れていた。

「ハアハア、走ったの意味なかった…。」

スバルもゴンタもキザマ口もルナも自分の席でグツタリしている。

ゴンタに限っては、机に顔を乗せて動けないような状態だ。

ルナは回りの女子生徒から、少し心配されている。

スバルは「さすがは生徒会長だな」と思っていた。

秋空の朝（後書き）

という感じで今日は終わり。

スバル：短くない？

良いじゃん良いじゃん。

ウォーロック：よくねーよ。

いや、だって一話3部構成で行ってるからさ。

2人：そんなの知らない。

……まあ、そんなこんな、次回は！

スバル：きまってないんだよね？

…はい。

けどけど、内容を少し言っちゃえば、とある二人が転校してくるのです。

スバル：とある二人って？

それはまた次回のお楽しみ

友人との出会い（前書き）

いつものように学校へ登校したスバルたち。

自分の席でゆっくりしている。

そんな日、実を言えば生徒たちみんなの心は躍っていた。

友人との出会い

自分の席でグッタリしているスバルたち。

そんなのをよそに、ルナだけは回りの女子生徒たちとはしゃいでいた。

何を話しているかは、廊下からの声・教室内で響く声によって聞けない。

けれども、この日の5年A組の生徒たちの様子は明らかに違っていた。

何かを楽しみにしている様子が、生徒たちの言葉・態度からスバルたちにヒシヒシと伝わっている。

そんななか朝の会を始めるチャイムが鳴る。

生徒たちの声で聞こえにくいものの、廊下に居た生徒たちは自分たちの教室へと帰っていった。

チャイムが鳴って一分後、スバルたちの教室に、あのアフロ髪 of 先生―育田先生が入ってくる。

「よし、皆そろってるな。朝の会を始めろぞ。」

そういうと、その日の日直が教室にいる生徒に起立を促す。

「おはようございます！」という元気な声が、朝の教室に響き渡った。

そして、生徒たち全員が着席する。

普通はここで静かになる。

だが、5年A組だけは静かになるどころか、ザワザワし始めた。

「はいはい、興奮してるのは分かるが、静かになろう皆。」

そう、育田先生が生徒全員に促すが、生徒たちはそんなことなど聞

く耳を持たないようで静まりはしなかった。

そんななか、生徒の一人が育田先生に質問する。

「先生、転校生は女の子ですか、それとも男の子ですか？」

その質問に教室にいる生徒たちが動揺を見せる。

スバルたちも例外ではない。

「そういえば、転校生が来るのは分かってたけど、男の子か女の子かは知らなかったな。」

そうスバルが小さな声で言う。

「ほいほい、それは転校生が教室に入ってきたら分かるから、もう少し我慢しろ。」

そんな注意も無駄に等しかった。

生徒たちは、早く転校生に会いたい気持ちでいっぱいの状態だ。

「分かった分かった、じゃあ入ってきてもらおうか。」

「「「やったー！ー！」「」「」

そうして、教室のドアが開かれる準備が出来た。

転校生は誰かのか、どんな子なのか、生徒たちは胸をドキドキと驚かせながら、ドアの方を見つめ始める。

スバルもルナもゴンタもキザマ口も、他の生徒達同様の気持ちでドアの方を見ていた。

ゆっくりと教室のドアが開かれ、転校生の実態が明らかになっていく。

一步一步、ゆつくりと、転校生が教室へ入ってくる。そうして、一人の生徒の驚きは一瞬にして教室全体へ広がった。誰もが驚いた転校生の正体、それは国民的アイドルである彼女だったからだ。

「ベイサイドシティから来ました、響ミソラです！」

スバルたち以外の生徒たちは、口をポツカリと開けて呆然としていた。

国民的アイドルが自分たちの教室に、しかも目の前にいるという衝動にかられる生徒たち。

スバルやルナたちは、いつも会ったりしていたおかげで、そんなことはなかった。

朝の会が終わり、一時間目が始まるまでの休み時間に入る。

そんな休み時間、ミソラは教室にいるファンの質問の対応に追われていた。

「なんで転校してきたのー？」

「新作のCD買ったよ！」

そんな質問の最中、ミソラは視線をスバルたちのほうに向ける。

どうやら助けを求めているようだ。

そのスバルたちかというと、助けに行きたくても助けに行けない状況だった。

そうして、休み時間が終わり一時間目が始まる。

一時間目はミソラの席決め、そして……。

「皆で外に出てドッジボールだ！」

「「「おつしゃーーーーー!!」」」

生徒たちの歓喜の声が教室に響く。

ゴントはさっきまでのつかれは何処へやら、元気になってガッツポーズしていた。

そんななか、ルナが話し始める。

「先生、ミソラちゃんの席を決めるのは良いのですが、皆「自分がミソラちゃんの隣の席になるんだ」って気、満々ですよ。」

ミソラの隣の席になる、それはすなわち一番ミソラに接近できるという最大のチャンスなのである。

コレを逃すまいと、回りの男子生徒・女子生徒は必死なのだ。

それを様子から感じ取ったルナは、先生に言っておくことにして、意見を出したのだ。

「そうだな、さすがは白金。そこでだ、席はミソラ自身に決めてもらうことにした。」

そうして、ミソラの席争いは無事平和に解決された。

スバルは席がきまつた直後、男子生徒たちからものすごい視線を浴びたのは、間違いない。

ゴンタやキザマロからも、そんな視線を受けたスバル。

「なんか、ものすごく居心地悪いや…。」

《頑張れ、スバル。》

「うん、頑張るよ。」

そうして、スバルたちは運動場へかけていった。

友人との出会い（後書き）

二度目の更新。

この回はミソラが転校してくる回になったにや。

ミソラやツカサが、転校してくるのはよくあるパターンだよね。

スバル：居心地悪いよ。

そんなこと言ってたら、ミソラちゃんから何か来るよ？スバル。

スバル：うう。

さて、今回はドッジボールをする回なのですが、色々起こります！

天牙：ようやく私の登場か。

感想…：よろしく願いします！

それは事の前触れか（前書き）

転校生の正体は響ミソラだった！

そんな5年A組はミソラの席決めも終わり、運動場へ出てドッジボールをする事に…。

何かが起こることなど知ることもなく…。

それは事の前触れか

そんなころ、コダマ小の屋上では、一人の少女と一匹のカラスが何か話していた。

少女の方は眠たそうに話している。

「フア~~~~、トイレに行く」って言って授業抜け出してきたは良いものの、やることがめんどくさい。」

《何を言うのですか、それが貴方と私にかせられた使命ですよ。》

「分かってるよ、それでもさ、世の中めんどくさいことだってあるじゃん。」

《はあ、相変わらずですね。まあ、私はそんな貴方が好きですけど。》

「ありがとさん。さてと、んじゃ…やりますか。」

そう言いながら少女は腰につけている小さなポシェットらしきところから、携帯端末―ハンターV Gを取り出す。

《私はいつでも準備出来てますよ。》

何かを促すように、カラスが少女に喋る。
そして…

「おし…、そんじゃ…」

彼女は天高く叫んだ。
誰にも聞こえないように。

――トランスコード――

一方のスバルたちは、運動場でドッジボールの真っ最中。
チーム分けは、右がスバル・ルナ・キザマロとその他生徒たちで、
左はミソラ・ゴンタとその他生徒たちだ。

お互いの内野に残っているのはスバルとゴンタ、その他少しの生徒
だけ。

それでも、有利なのは左のゴンタのいるチームである。

「覚悟しろ、スバル！」

「うつわ……こっち不利だ。」

「スバル君！何してるのよ！さっさと倒しちゃいなさい！」

「頑張れ、ゴンタ君！」

そして、ゴンタがボールを持っている手を振り上げる。

その手を振り下げると同時に、ボールはその手から離れていった。
スバル目掛けて、ボールが一直線に飛んでくる。

帆を描くことなく、直線状に凄く速さで飛んできている。

スバルはそれを避けようと、横へ飛ぶ。

だが、そんなボールの起動は、不可思議な事によって、避けたスバルの方へと変えられた。

「えっ?!」

結局、スバルはそんな不可思議なボールに当たってしまい、スバルのチームは負けてしまった。
ルナが、スバルに説教するためか、近寄っている。

《ハハッ！スバル、情けないな！》

「あのボール、おかしかったよね?!」

「何で当たったのよー!」

「だって、ボールが追いかけてきたんだよ!あんなの避けれる?!」

「問答無用!」

そんな楽しい会話が運動場に響く中、怪しいモノが彼らに近寄ってきていた。

それは、突如現れては木々を靡かせ、木の葉を飛ばすもの。

「すごい、ゴンタ君!あんなこともできたんだ」。

「へ…へへっ!だろ」。

ミソラとゴンタがそんな風に話していた直後、ヤツは突如大きく荒々しく吹き始めた。

生徒たちは、運動場にこけたりしてしまっている。

あるいは、顔を腕でかばい、耐えようとしている生徒もいる。

育田先生はとっさに注意を促した。

「皆！校舎の中に入るんだ！急いで！」

その声で、スバルやその他の生徒たちは一斉に校舎向けて走り始める。

風はスバルたちの背の方向から吹いている。

つまり追い風となっているのだ。

あまりの速さに、校舎内に入っても止まりきれない生徒がいるようだ。

校舎内に入ったスバルたちは、自分たちの教室へ戻り始める。

「スバルくん、ものすごい風だね。」

「本当、すごい風だな。」

「ペディア、この風はどれほどのものなのでしょうか。」

《この風の強さだね、調べてみるよ！》

そう言っ、何かをするペディア。

それをじっと見ている、スバルたちは結果がどれほどのものなのか、待ちわびていた。

ルナもミソラもスバルもゴンタもキザマロも、それは良い結果ではないことは既に分かっているようであった。

可愛い電子音が、廊下に一瞬だけ響く。

《結果が出たよ！これは……ありえないよ！》

驚いているペディア。

その結果は、驚きのものだった。

「この数値は、台風並じゃないですか！」

《しかも、この日本上空、何処にもそんな雲が見当たらないんだ！》

「?...それで、こんな風が吹くの。」

スバルたち、そして周りにいた生徒・教員全てが驚いていた。

それは事の前触れか（後書き）

というところで、とりあえずお終い。

スバル：そういえばさ、前の回で転校してくるのは2人じゃなかったの？

急遽、1人にしてしまいました。
本当に申し訳ありません。

ウォーロック：物忘れ激しいやつだな。

はい、そのとおり、私は鳥頭な人です。

スバル：まあ、そんなことは置いておいて、次回は？

次回は…この風を吹かせた張本人が出てきます。
名前と正体こそ出さないけれど、まあ出てきます。

ウォーロック：誰なんだろうな。

感想よろしくお願いします！

屋上への道（前書き）

ドッジボールをしていたスバルたち。

屋上には怪しい少女とカラス。

そして、突如吹き始めた台風並みの荒々しい風。

その風は自然のものか、それとも誰かが意図的に起こしたもののか。
スバルたちは、不可思議な風を追う。

屋上への道

その日合った外での授業は、この風により全て中止になってしまった。

スバルたちのしていたドッジボールも、他のクラスで予定されていた外の授業も全てだ。

全ての学年で、自習になった。

いたって自由な自習時間、生徒たちは友達の教室へ行って勉強・お喋りをしている。

スバルたちも、委員長の席に集まって、至って自由にお喋りをしていた。

「ねえねえ、これからどうするの？」

そうミソラが、スバルたちの問う。

それに悩みながらも答えようとする、スバルやルナ。
けれども答えは出てこない。

《悩むだけ無駄だな。》

《ええ、そうね。はあゝ。》

などと、ハンターの中から出来ているウォーロックとハープが呆れ顔で言った。

5年A組に残っている生徒はスバルたちだけ。

他の生徒たちは、全員別の教室へ遊びに行ったのだ。

オックスに限っては、床の上で寝ている。

静かな教室、他の教室は賑やかだ。

そんな中、キザマロはハンターを開いて何かをしているようだ。

「何してるの、キザマロ。」

スバルがキザマロに話しかける。

「天気などの情報を集めているのですが、日本上空にそんな雲などはないようです。」

スバルやルナたちは「やっぱりか」という顔をして、勉強を始めた。そんなスバルたちをよそに、ウォーロックたちは教室の後ろのほうで遊び始めていた。

少しだけ賑やかになった5年A組の教室、スバルたちの顔が少しだけ和らぐ。

《おい！ハープ！それはどういうことだ！》

《さあ〜ね〜、受け取り方はウォーロックの自由よ〜。》

《てめー！》

次の瞬間、ウォーロックが床で寝ているオックスにつまずいてしまった。

その衝撃でオックスが目覚めます。

まだ寝ぼけているオックスは、何が起こったか把握できていない様子。

そんな中、教室よりも廊下の方がなにやら騒がしい様子だった。不意に廊下のほうへ行き、様子を見るスバルたち。

「何してるんだらう。」

そんな事を良いながらスバルたちはドアの隙間から、その話を聴いている。

「トイレは見に行ったのか?!」

そう、男性教師が女性教師に言う。

「見に行っただんですが、返事をしなくて...。」

「ああ、こんなときになんでトイレなんて行ってるんだ、あの子は。」

どうやら先生たちは誰かを探しているようだ。

「誰探してるんだろう。」

「あれって、6年生の先生じゃないの。」

「えっ、そうだったけ?」

「そうよ、何言ってるのスバル君。」

なんだか、とぼけているスバル。

そんな時、スバルのハンターが鳴りはじめる。

それは、いつものあの人だった。

『おお、スバルか?』

その声のスバルたちが一斉に声を合わせて名前を言う。

「「「曉さん！」「」」

陽気な口調、そして聞き覚えのある声、彼らには曉シドウの名前しか出てこなかった。

出てきているディスプレイには顔は映っていない。

この荒れた台風並みの風のせいで、電波が乱れているのだ。

『いや、なかなかつながらなくてな。』

《それよりなんだ、どうかしたのか？》

『なんかそっちのほうで、すごい風が吹いてるそうじゃないか。』

「もう、帰れないほど吹いてますよ！」

「けど、それがどうかしたの？」

『いや、なんか怪しいからアシッドと博士とオレで調べてみたんだ。』

「それで・・・どうだったんですか？」

『屋上に誰がいるっぽいぞ。あつ、電波悪い…俺もすぐそっちに行く！切るぞ！』

そう言い、曉は電話を切った。

スバルたちは、曉の言っていた言葉に顔を合わせる。

「屋上…？」

「どうして屋上...?」

スバルたちが首をかしげている中、ウォーロックたちは違った何かを感じ取っている顔のウォーロック・ハープ・オックス。

《ああ、暁の言ってるとおりだな。》

《そうね、けどこんな電波感じたことすらないわ。》

《けど、うつすらだな、電波の乱れがひどいせいで分からん。》

「ということは、この風を吹かせた犯人は屋上にいるって事だね。」

「ってことは、私たちの出番だね！スバル君！」

顔を見合わせるスバルとミソラ。

二人は、腰のポシェット・ポケットからハンターを取り出す。

ゴンタもそれについていくように、ポケットからハンターを取り出した。

それと同時に、チャイムが鳴る。

生徒たちが廊下に出始める。

「いくよ！ミソラちゃん！ゴンタ！」

「おう！」

「もちろん！」

生徒たちの声と姿に紛れ、スバルたちは姿を変えウェーブロードに降り立った。

屋上への道（後書き）

ここまで書いたーーーー！！

スバル：お疲れ様。

何時間かけたことか。

その間作業が中断してたのさ。

しかも、なんかよく分からんけど、文字数制限が恐ろしくなってここまでにしたんだ。

そのせいで、タイトルも少々変えちゃった。

ウォーロック：後半滅茶苦茶だな。

申し訳ない…本当。

次で、一話分終わると思います。

スバル：一話三部構成だったはずなのに、一話5部構成ぐらいになってるね。

うわー、それ以上言わないでえええー！

風を吹かせる妖怪（前書き）

教室でのんびり自習をしているスバルたち。

そんな時、暁シドウからスバルのハンターに電話が来る。

「屋上に誰がいるぞ。」

スバルたちは、空の道―ウェーブロードを伝い、屋上へ向う！

風を吹かせる妖怪

ウェーブロードに降り立ったスバルーロックマンたち。

屋上へ向うため、周波数を変え、ウェーブロードを翔けぬけていく。廊下にいる生徒たちは、何も変わらず平然と遊んでいる。

「屋上だ！」

周波数を変え校舎の壁をすり抜けて外へ…屋上へ出る。

そこには、いつもと同じ風景が流れていた。

木々が靡き、花が咲き…平和そのものだ。

そして何より、回りと違った。

ハープ・ノートの口から、その違いが言われた。

「風が吹いてない…よね。」

屋上から下を見るロックマンとオックス・ファイア。

運動場の脇に生えている木々は、荒れ狂う風によって今にも倒れそうなくらい揺れている。

それに対し、ロックマンたちのいる屋上に生えている木々は、何事も無いように小さく靡いている。

無風に近い状態なのだ。

「どうして…？」

そう3人が不思議そうに言う。

校舎の周りは、立つことすらままならないほどのすざましい風、屋上は普通に立つことが出来るほど風が吹いていない。

そんな事に驚いているロックマンたち。

すると、何処からか声が聞こえてくる。

「ほお、風から聞いたことはあったけど、本当に居たんだな。ロツクマンとハーブ・ノートとオックス・ファイアって。」

声が聞こえ終わると、一瞬ものすごい暴風がスバルたちの周りに吹く。

吹き終わると、目の前には、何かよく分からない者がいた。

三人は声を合わせて言う。

「何あれ…?」

赤い顔、長い鼻、背中には黒い色をした羽が生え、和を象徴している服を着ていて、そして下駄を履いた何か。

ロツクマンたちは、それが何か分からない様だ。

「この風を吹かせている犯人なのか…?」

ロツクマンの口からそう出る。

それに対して、やつは…。

「ああ、そうだ。何か問題でもあったか?」

何事もなかったかのような声で、返答する。

「オオアリだ!この風のせいで、皆家に帰りたくても帰れない状態なんだ!」

「おお、そりゃ困ったな。まあ、私の知ったことじゃないが。」

《こいつ、なんていう無責任なやつなんだ。》

「めんどくさがりなだけさ、だからあまり深く考えない。」

「どういうことだ？」

「私は、あのお方に言われたことをやっただけ、それがこれってワケ。」

ロックマンたちにはワケが分からなかった。

頭の中に浮かぶ答えは、ただ「風を吹かせた」とだけ。

どうやっても、その答えにしかたどり着けなかった。

すると、やつは話し始める。

「ああ、人間には分からんか。そうだな、これは妖怪だけが知ってることだし。」

全てがチンプンカンプンなロックマンたちは、頭を抱えて悩んでいた。

「妖怪」という単語、そして「あのお方様」という誰か。

すべてが分からないことだらけのロックマンたちは、悩むのを諦め、やつに聞くことにした。

「なんで、風を吹かせたんだ？」

「ああ、めんどくさい、さっきも言っただろ？」

あのお方に言われたことをやっただけって。んなことも分からんのか、今の小学5年は。」

「?!」

驚くロックマンたち。

彼らの正体を知っているのは、ルナ・キザマロと暁たちサテラポリスの人々だけだ。

「ん？ああ、私が高んでお前らの正体と学年を知ってるか不思議なのか。」

平然とそんな事を言うやつは、片手に変わった形の扇をだし、自分の顔を仰いでいる。

さらには、口を大きく開け、あくびまでしている。

「なんで、僕達の正体を…。」

顔に汗を流しながら、ロックマンがやつに問う。

「ん？ああ、私は風の声が聞こえるんだ。風は全てを知ってる。だから、お前たちの正体も分かる。私は風の声が聞こえる上に、風と対話できるからな。」

「でも……。」

「つと、そろそろ戻らなきゃならないみたいだ。」

「えっ?!」

「最後に1つだけ言うておくとするか。」

そっつい、やつは真っ直ぐロックマンたちのほうを向き、一言言い始める。

「これから始まるであろうことに、お前たち人間は首を突っ込むな、事がややこしくなる。」

そう言つて、彼は風とともに消えていった。

結局、スバルたちは知りたいことを知ることなく、教室へ戻つていった。

暴風は止み、その日予定されていた5・6時間目の体育の授業は予定通り開始された。

6時間目が終わり、掃除が始まる。

それから数分後に、暁たちサテラポリスが到着。

あたりを調べたが、やつが何かをした痕跡は何一つなかったという。スバルたちは結局、やつが何をしたかったのかも分からないまま、その日の学校を終えた。

そんな日の放課後、スバル・ゴンタ・ミソラは暁に「屋上へ来い」と呼び出された。

屋上へゆつくりと歩いていくスバル。

その頭の中には、やつと言った言葉が引っかかっていた。

「これから始まるであろうことに、お前たち人間は首を突っ込むな、事がややこしくなる。」

この言葉が何を意味するのか、分からないままだった。

屋上へ入るためのドアをゆつくりと開けるゴンタ。

あけると、そこにはいつもと同じ屋上から見た風景があつた。

「スバル、こっちこっち。」

暁がスバルたちを呼ぶ。

屋上には、暁たちしかおらず、普通に秘密にしていることが話せる状態だった。

暁の側に3人が駆け寄る。

「暁さん、それで何か…？」

「ああ、やつはどんな姿してた？」

暁からの最初の質問だ。

それに対して、詳しく返答するスバル。

「えっと、たしか顔が赤くて鼻が長くて…赤くて小さな帽子被ってた気がする。」

それにミソラが補足する。

「スカート穿いていたね、あと髪の毛は黒かった気がする。」

それらの情報を聞いた暁は、頭の中でそれが何かを考えている。けれども、結果はスバルたちと同じだった。

「なんだろうな、俺もさっぱりわからない。」

《サテライトサーバー内にも、そのような情報は一切ありませんでした。》

結局、何もかも分からないまま。

これから先、どうすれば良いのかさえも分からない様子のスバルたち。

そんなとき、不意に小さな風が吹いた。

「あつ、そつえば。」

スバルは何かを思い出し、暁に話し始める。

「あいつが、変な事を言ってたんです。」

「ほお、そりやなんだ？」

「「これから起こるであろう事に、人間は首を突っ込むな、事がややこしくなる。」って。」

《ということは、何か事件が起こるようですね、シドウ。》

「そのようだな、よしヨイリー博士達と相談して「サテラポリス遊撃隊」の再結成を考えてみるか。」

スバルたちの顔が驚きでみちる。

「暁さん！それ本当ですか？！」

「ん？ああ、まあ一応な。事が大きくなっていったらダメだからな。」

こうして、暁はサテラポリス日本支部へと帰って行った。

スバルは、家に帰り母親―アカネと父親―大吾にこの事を話した。

「気をつけるよ、スバル。」

そう言って二人とも、スバルがまた戦うことを了承した。
母親のアカネの顔は、やはり少し心配していたが「これがあの子の運命なのよね。」といい、納得した。

こうして、新たな戦いは注意があつたにもかかわらず、刻々と始まりへと近づいていった。

風を吹かせる妖怪（後書き）

よぉーし、これでようやく一話終了！

スバル：お疲れ様だね。

ウォーロック：にしてもよ、あの鼻の長いやつ誰なんだ？

スバル：そういえばそうだね、アシッドが「サテライトサーバーにもそのような情報は一切ありませんでした」って言ってたし。

それに関しては、かなり先の話で明らかになるよ。

（人物目録見てる人なら分かるかもしれないけど。）

スバル：で、次回は？

次回は、ようやく第二話へ突入！

最初はスバルが隣の家に挨拶しに行く回だよ。

翼妖家（前書き）

結局、暴風を吹かせた犯人のやりたいことがわからないまま、その日を終えたスバルたち。

暁から、遊撃隊再結成などまあ、色々なことがあり、いつもの日々へ。

この日、星河家は隣の家にあ挨拶しに行くことに…。

翼妖家

暴風の吹いた日の次の日の朝、父親の大吾、母親のアカネと共にスバルはいつものように朝ごはんを食べている。
この日の星河家はなんだか賑やかだ。

「フガフガ。それでさ父さん。」

「何だ、スバル。」

「お隣さんって、いつ引っ越してきたのかな？」

「…それを俺に聞かれてもな、分からんぞスバル。」

「…だよね、ごめん。」

大吾が隣の家は何処かの家族が引っ越してきたのなど、知るはずがない。

というのも、その家は数年前に立てられた新築の家。

大吾が帰ってきたのはほんの2・3ヶ月前。

スバルとアカネは、家が建てられたのは知っていたようだが、誰が引っ越してくるかは知らなかったようだ。

朝ごはんを食べ終えたスバルたちは、隣の家へ挨拶をしにいくために外へ出る。

そんなとき、アカネがふと口を開ける。

「お隣さんから、人が出るところ見たこと無いのよね、そういえば。」

「そうなの？」

「そうなのよ。なのに、部屋の電気ついてたりするのよね。」

その発言に、スバルの顔がこわばる。

その顔を見ながら、ウォーロックと大吾は笑っている。

「母さん、そういうこと言わないでよ。」

「あれ、母さん何か悪いこと言った？」

《おふくろ、スバルは怖い話が嫌いなんだ。》

「あら、そうなのスバル？」

「もぉー！ウォーロック言わないでよ。」

そんな会話を玄関でしながら、靴を履く。

笑いが玄関内に響いている。

そうして、大吾が扉を開けて、3人は外へ出る。

隣の家までは徒歩10歩ほどの距離。

「それにしても綺麗なお家ね、お隣さん。」

そうアカネが言う。

外見は周りと同じ感じなのに、何処か和を感じるものの出来るつくりになっている。

周りの家から比べると少し地味だけれど、目立っている。

歩いて家の前まで行く。

大またで4歩、普通に歩いて10歩のところ、あっという間に家の

前まで着いた。

大吾がスバルにベルを押すように促している。

素直なスバルは、嫌がりながらもベルを押した。

ピンポンという音が少しだけ鳴る。

すると、家の中からドタバタ！という音が聞こえ、玄関まで近寄ってくる。

スバルの顔はさらにこわばっていた。

玄関から、声が聞こえる。

「どなたですか？」

女性の声、しかもまだ若い。

アカネは、その声の質問に答える。

「隣の家の星河というものです、挨拶をしにきたのですが、大丈夫でしょうか。」

「んー、両親がいないけど、まあいいや。」

そう言つて、ドアが開けられる。

ドアの先にいたのは、小学六年ほどの身長148ぐらいの女の子だった。

その女の子は、さらに続ける。

「えっと、星河さん…ですっけ？」

「ええ、お隣の星河です、その…。」

「あつ、挨拶ですっけ？」

「はい。」

「えっと、私、翼妖天牙です。」

その女の子は自分の名前を言った。

「私は星河アカネです、こっちの赤い服の男の子は私たちの子の…。」

「星河スバルです。」

「で、アカネの妻の大吾です。」

星河家の挨拶がすむ。

すると、何故かその場が静かになってしまった。スバルは心の中でへんなことを思う。

（天牙って子、人見知りなのかな…。）

そんな風に思っているスバル。

すると、天牙と名乗った女の子が話し始める。

「こんなところで立ち話するのなんですし、中に入ってくださいな。」

スバルが驚き口を開け放し始める。

「けど、」両親いないんじゃないか…。」

「別に親はこういうの気にしないから、まあ中に入って座ってお待

ちください、すぐお茶入れますので…。」

そういうと、天牙は玄関のドアを開けっ放しで台所の方へ向かっていった。

翼妖家（後書き）

ということで、第二話突入！

スバル：中に入っちゃうの？！

アカネ：挨拶だけのつもりだったのにね。

大吾：まあ、いいじゃないか。

そう、大吾さんの言うとおり。

天牙：作者とスバルたちは置いておいて、次回は家の中に入って色々するらしい。

スバル：お家の中公開！ってこと。

天牙：まあ、そういうこと。ああ、めんどくさい。

3人：えっ？！

出来れば、感想よろしくお願いします！

お邪魔します（前書き）

隣の家ですんでいる翼妖家に挨拶をしにいく星河家。
色々あつて家の中へ！

お邪魔します

スバルたちは、開けっ放しの玄関で少しボケツとしたあと、家の中へ入っていく。

家の外は和を感じさせつつ洋として見れる造りになっている。

だが、中は外とは一変し、和だけが感じとれる造りとなっていた。柱や床が木で出来ていて、テレビの置かれているところの一部だけ畳で出来ていた。

「うわあ、僕の家と違うや。」

「これが和だな、温かみと言うか…良い造りだな。」

窓から照る日の光が床を暖め、部屋に電気をつけなくても暖かくなっている。

さらに、そのおかげで部屋が暗くなることなく、明るい状態だ。

「こういうお家も良いわね。」

アカネがなにやら羨ましそうな顔で、部屋を見渡している。

玄関で立ち尽くしているスバルたち。

すると、天牙がやってきてスバルたちに「中に入って座って待って」と促す。

スバルたちに断る暇も与えることなく、天牙は台所の方へ戻っていた。

あえなくスバルたちは、靴を脱ぎ部屋の中へ入っていく。

ほのかに暖かい部屋の中、床は綺麗にされている。

「綺麗なリビングね。」

「あつ、お茶出来たので…そっちの小さな机の周りに座ってください。」

そう言つて、天牙はお盆にお茶を入れた茶飲みを置き、スバルたちのほうへ行く。

小さな机の周りに座るスバルたち、その目の前に天牙は茶飲みを置いていく。

「あつ、ありがとうございます。」

「いえいえ、これぐらいはしなきゃいけませんよ。」

そう言つて、天牙はスバルの反対側に座る。

そうして、その場が静かになつてしまふ。

スバルはよく分からない緊張に囚われ、何とかしようと必死に話題を考える。

そんなスバルをよそに、天牙が口を開く。

「で…どうしましょうか。」

その発言に、星河家全員が驚き、声を合わせて同じ言葉を言う。

「えっ?!」

「えつと…。」

そう言いながら天牙は焦っている。

スバルと大吾の顔は、そんな天牙に対し呆れている。

笑つてごまかしている天牙。

そうして、また静かになる。

窓の側では、小鳥が気ままに可愛い声で鳴いている。

時間が止まったかのような感覚に陥るリビング。

天牙とスバルは、同じような顔をして必死に何かを考えている。

大吾とアカネは、目の前に置かれているお茶を飲んでいる。

そんな時間がしばらく流れた。

急に天牙が立ち上がり、スバルたち向けて話し始める。

「そういえば、母さんが昨日何か買ってきてたな……。ちょっと探してきますので、そのままお待ちください。」

そう言つて、天牙は台所向けて、いそいそと向つていった。
取り残されたスバルたち。

スバルはとりあえず、目の前に置かれているお茶を飲むことにする。
茶飲みから、スバルの口の中にお茶が流れ込んでいく。

口の中にお茶が入った瞬間、スバルの表情が一瞬にして変わった。

「苦っ！」

「あらスバル、緑茶つて気がついてなかったの？」

そんな事を笑いながらアカネがスバルに言う。

スバルは「えっ？」という顔をして、とぼけている。

「見てみなさい、お茶の色が緑でしょ？」

「あつ、うん。」

「コレは緑茶よ、苦いのが良いわ。」

そんなアカネをスバルは心の中で妙に感じていた。

（今日の母さん、おかしい！）

そんな事を思っていると、天牙が台所から何かの箱を持って戻ってくる。

「遅くなって申し訳ないです〜。」

「いえいえ、で何を？」

「あつ、母さんが今日の夜にでも挨拶に行こうと思ってたのかわからないけど、大きいまんじゅう買ってきてたので。よければ、貰ってください。」

そう言つて机の上にまんじゅうの入った箱を置く。

箱には「外のまんじゅう」という、訳の分からない名前が書かれてある。

その名前にスバルは微笑している。

「まあ、味は保障するので…。」

そんな風に言っている天牙。

スバルは少し心配になる。

こうして、星河家はお饅頭を貰い、家に帰ることにする。

玄関のドアを天牙が開け、スバルたちは外へでる。

お邪魔します（後書き）

今日はコレでおしまい・・・。
色々あって・・・。

感想よろしくお願いします・

（決して手を抜いたわけじゃないです。）

それは空を飛びながら幸せを（前書き）

スバルたちは天牙の家の中へ入る。

すると、天牙はお茶を持ってきた。

しばしの沈黙。

天牙は立ち上がり、台所からまんじゅうを持って来て、スバルたち
にあげる。

そうして、スバルたちは天牙の家から出た。

それは空を飛びながら幸せを

天牙の家から出たスバルたち。

ウォーロックは、その大きな両手で饅頭の入っている小さな箱持つと大はしゃぎで駆け出した。

《おふくろ、家に帰ったらこれ食べようぜ！》

「はいはい、ウォーロック君そうしましょうか。」

《おっしゃー！ー！》

大はしゃぎのウォーロックに対し、スバルは口の中に緑茶の苦味が残っているようで、妙な顔になっていた。

それを見たウォーロックは、大笑い。

スバルは恥ずかしくなり、顔を赤らめる。

そんな風にして歩いていると、スバルが何かにぶつかる。ぶつかったのはウォーロックだった。

「もうウォーロック、そんなところで立ち止まらないですよ。」

そんな風に言いながら、スバルはウォーロックの方を見る。空にいる何かを、見つめているようだ。

「何見てるの、ウォーロック？」

そう言いながら、スバルはウォーロックの目線の先をしてみる。そこにいたのは、青色や緑色、白色をした可愛い目と口のある綿毛。

「あれって、ウィルス？」

《さあな、なににせよ戦意は全く感じれない。》

そんな風に言っていると、アカネと大吾がその綿毛を見て反応する。

「大吾さん、あれ可愛いわね。」

「ん？ああ、可愛いな。なんだか、幸せになれる。」

よく見てみると、それは大吾達だけに限られていなかった。
外にいる近所の大人・子供がそれを見つめて「可愛いな」と言っている。

数分後その綿毛が、何処かへ消え去っていくと、外にいる人は皆それぞれ自分のしようにしていた事をするのだった。

スバルたちも、自分の家に帰る。

家に帰ると、早速アカネが饅頭の入った箱を机の上に置き開け始める。

《おおー！上手そうじゃねーか！》

「コレはうまそうだ、パッケージの名前とは裏腹に。」

そんなころ、スバルは自分の部屋に颯爽と戻って誰かに電話していた。

相手は…。

「あつ、暁さんですか？」

『おお、スバルか、どうした？』

「えっと・・・実は・・・。」

スバルは今さっきあったことを、暁に話す。

『スバルのところでもあったのか。』

「と言うことは、そちらでも？」

『ああ、アシッドもヨイリー博士も皆窓から眺めてたよ。』

「何かの前触れでしょうか・・・？」

少し心配になるスバル。

その表情は、少し曇り気味。

そんなスバルを気にしないで、暁はいつもの調子で話す。

『んー、なんだろうな。今、それに関してヨイリー博士たちが話し合ってるところだ。』

それを聞いてスバルは「あっ」となる。

「もしかして、会議を邪魔しちゃいました？」

『そんなことないぞー。』

「それなら良かった・・・。」

ほっとするスバル。

顔が少しだけ明るくなる。

「邪魔しちゃったとしたらどうしよう」と思っていたのだ。
そんなスバル、暁はあることをスバルに話した。

「・・・ほ・・・本当ですか?!」

『ああ、お前が電話をかけてくる3分前ぐらいにきまったことだ。』

「ミソラちゃんたちには連絡したのですか？」

『スバル、お前がそんなときに電話かけてきたからしてないぞ。』

『

「あう、すみません。」

『あはは、気にするな。あつ、あと・・・。』

暁は小さな声でスバルにもう一つ、あることを告げる。

前のことに続き、それは驚きの話だった。

『今回ののは楽しくなるぞ。』

などと言いながら暁は颯爽と電話を切った。

その日、スバルの頭の中は色々なことで一杯になっていた。
夕方、いつものように家を出て、展望台へ向うスバル。

「ああ、また戦うことになるのか。」

《まあ、それはそれで俺は大歓迎だな。》

「またロツクは・・・。」

そんな風に歩いていると、スバルは自分の前を歩く一人の少女に目が行く。

どこかで見たことのある面影と服。

少しだけ早歩きになる。

だんだん近づき、とうとう腕を伸ばせば手が届くまでの距離になる。そうして気がつく、その少女が誰なのかが。

ピンクの服を着て、背中にはギターをしまった姿は、スバルの最初のブラザーの子。

そして、先日スバルのクラスに転校してきた少女だ。

「ミソラちゃん?!」

「あつ、スバルくん、こんなところで合っなんて。」

「って言うか何してるの?」

そうミソラに質問するスバル。

すると、ミソラは逆にスバルに質問し始める。

「そういうスバル君も何してるの?」

「えっ、僕は展望台に……。」

そうスバルが言うと、ミソラはスバルの肩を両手で一回叩き、目をキラキラさせて話し始める。

「奇遇だね! 私も、展望台に行こうとしてたんだ!」

「うわ、奇遇だね。」

「だね！」

そうして、スバルとミソラは一緒に展望台向けて、夕日の照る道を並んで歩いていく。

それは空を飛びながら幸せを（後書き）

おし！昨日書こうとしたところまで何とか書けた！

スバル：ここからどうなるの？！

ルナ：ちょっと作者！これどうなるのよ！

――委員長説得中――

というわけで、今回は展望台でスバミソ派の方は最高になるような展開になります。

ルナ：後々、私とスバル君にもそういう展開あるんでしょうね？

あ・・・ありますとも。

考えておきますので、そんな怖い顔しないでください。

スバル：次回もよろしくお願いします。

思うのは容易くも言葉に出すのは（前書き）

空に浮かぶ、不思議な綿毛。

それは人々に幸せを届けた。

その日の夕方、スバルは展望台へ向うために外へでる。

その道中、響ミソラに出会い、一緒に展望台へ向うことに…。

思うのは容易くも言葉に出すのは

二人並んで道を歩く。

道行く人は、皆そんな二人を見つめていた。

スバルはそんな事を気にして、恥ずかしくなり頬を赤らめて顔を下に向けている。

太陽は、山に隠れ始めている。

展望台へ上がる階段まで二人は来た。

「この階段、頑張つて上ろう！」

ミソラは意気揚々と、階段を登り始める。

そんなミソラを追いかけるように、ゆっくりとスバルも階段を登り始めていく。

太陽が山の頭から少しだけ顔を見せている時間になった。

あと少しで夜になってしまふそんな時間に、スバルとミソラは展望台へ到着する。

「ふう、疲れた。」

「今日は何が見えるかな。」

疲れて少し休んでいるミソラに対し、スバルは今日見える星を考えて、展望台にある望遠鏡の側へ行っている。

（もう、スバル君つたら・・・。）

そんな事を思いながら、ミソラはスバルのところまで歩いていった。目を輝かせながら、その目で星を見つめるスバル。

普段大人しいスバルが、こんなにも子供っぽくなる。
それをミソラは可愛いと思った。

空は暗くなり、空に月が見え始め、星が輝き始める。

ミソラはそつとスバルの傍に寄っていく。

その距離は、知らぬ間にくっつくほどまでになっていた。

そんなの知る由のない、スバルは自分の中で少し遠くにいると思っ
ているミソラに話しかけた。

「ねえ！あの星、綺麗だね！」

「うん、綺麗だね。」

近くで聞こえたミソラの声に驚くスバル。

「い・・・いつの間に傍に来てたの！」

「スバル君が話してくる少し前に。」

「そ・・・そうだったんだ。」

そう言つてスバルは、また星を見始める。

そんなスバルに、ミソラは少しだけ呆れていた。

どうしてそんなにスバルが星がすきなのかは、分かっているミソラ。
星が羨ましい、そんな風に心の中で思ってしまうのが嫌でたまらな
い。

思い切つて行動にすることを、心に決めたミソラ。

心の鼓動が高鳴り始め、緊張していく。

（な・・・なんで、緊張するんだろう。）

以前として、スバルは星を見ているまま。

ミソラは、スバルを顔を見た。
目を輝かせている。

（こんな事思ってる場合じゃない！…ああー！もう行くもん！）

そう、自分の中で踏ん切りを決め、ミソラは行動に出る。
スバルに触れるまで近づいたミソラ。

「ミ…ミソラちゃん？！」

驚くスバル。

だが、次の瞬間ミソラはその左手でスバルの右手を握り締めた。
なにがなんだか分からないスバル。

ウォーロックに話しかけてみたものの、彼からの返事はない。

そのまま、スバルとミソラは一緒に星を眺めていた。

数十分後、スバルとミソラはその手を離し、喋り始める。

「ねえ、スバル君。」

「何…ミソラちゃん。」

その時、ミソラの胸は高鳴っていた。

「今日こそ告げる」そう、決めていたからだ。

いつも決めていた、なのに他の人に邪魔され告げることが出来なかったからである。

「あのね、スバル君！」

少しの沈黙。

そんな中でも星は光を受け、輝いている。

ミソラは、詰まっている言葉を無理やり口から出した。

「スバル君のこと、好きなんだ。」

そう言っで、ミソラはスバルの顔を見る。

スバルはどう答えれば良いか、困っていた。

そして、少し時間が流れる。

「ミソラちゃん…その…。」

「うん。」

「僕もミソラちゃんのこと、好きだよ。」

その言葉を聞き、ミソラの胸の高鳴りは最高潮を迎える。

「けど…その…言いにくいんだけどさ。」

スバルの言葉が詰まる。

ミソラはもうその口から言われることが分かっているようだった。

「ほかにも好きな子がいてさ…。」

「分かってる、いわなくて良いよ。」

そのミソラの言葉で、二人は自分の家へ帰っていった。

思うのは容易くも言葉に出すのは（後書き）

今日はコレで更新終了！

恋愛モノは自分には向いてないことが分かった。

スバル：じゃあ何で書いたの？！

挑戦しなきゃさ…何事にも。

スバル：なるほど。

次回は、第二話最後の回。

内容は暁からの……です！

ウォーロック：うむ、さっぱりわからん。

感想、よろしく願いします！

いつものように（前書き）

展望台に一緒に行くことになってしまった、スバルとミソラ。
展望台に着くと、スバルは上へ行き星を見る。

そこでミソラから告白される！

そんなこんな、ハチャメチャな一日は終わり・・・。

いつものように

その日の夜、スバルはよく分からないドキドキで眠れない状況にあった。

「ああ、何で眠れないんだろう…。」

布団から起き上がり、ボケーツとしている。

展望台でのミソラからの突然の告白。

返事は「好き」と言ったのだが、「他にも好きな子がいる」とも言ってしまった。

その時のどきどきがまだ残っているのだ。

スバルはハンターの中にいるウォーロックを見つめる。

見つめられているとうの本人はグッスリ夢の中だ。

「ああ…どうしよう、眠れそうに無いや。」

結局布団から出て、ベランダに出るスバル。

そこから見るのは、星。

「いつも綺麗だな。」

小さな星を眺めながら、スバルはそういう。

時たま、布団の上に置かれてあるハンターの中から、ウォーロックの奇妙な寝言が聞こえる。

「何言ってるんだろう…。」

少し気になり、後ろを見るスバル。

もちろんのことだが、ハンターには変化はない。

「…もう寝よう。」

そう言つてベランダから部屋に入り、窓を閉め布団に潜り眠つた。
そうして、次の日。

いつものように、起きるスバル。

「おはよう、ウォーロック。」

《おう、おはよう。》

いつもと同じ朝を迎えるスバル。

下に降り、台所の前に置かれてある机の周りにある椅子に座る。

この日の朝食はトーストと牛乳のみ。

アカネはスバルの前の席に座り、一緒に食べ始める。

「今日の良い具合に焼けてるわ。」

「いつもどおりだね。」

「もう、スバルったら。」

いつもどおりの会話。

食べ終わり、自分の部屋へ戻ったスバルは宿題を始める。

「うん。」

《どうした？》

「いや、ココ分からなくて…。」

《これは、俺にもわからん。》

そんな風に悩んでいると、誰からメールが届いた。
ウォーロックが、スバルにそのことを言う。

《おい、メール着てるぞ。》

「えっ？誰から？」

そうスバルに言われ、メールが誰からかをめんどくさそうに確認し
にいくウォーロック。

その間、スバルは宿題の分からない問題の答えを考えている。

スバルの側に戻ってくるウォーロック、その大きな手でハンターも
持ってきている。

「誰から？」

《暁からだ、今すぐサテラポリスまで来いだとよ。》

「てことは、集まるのかな。」

《さあな、とにかく行こうぜ！》

「うん！」

椅子から飛び出し、玄関へ一直線に走る。

階段を下りる途中にこけそうになったりするものの、アカネに一言
かけ、外へ飛び出していった。

そして、人気のない展望台までの階段へ走って行き、いつもの言葉を空高くに叫んだ。

「トランスコード シューティングスター ロックマン!!」

いつものように（後書き）

というわけで二話終了です。

スバル：また予定より内容少なかったね。

あれだ、作業用にBGM聞いてたりしたら作業できなくなって…。

スバル：聞かなきゃ良いじゃん。

聞いてなきゃ、なかなか進まないんだもん！

ーっというやり取りが数分続いて…ー

スバル：次回はようやく3話だね。

今回は、サテラポリスにスバルたちが集まるのだ。

そして、何かが起こる！

ついでに言えば、第一話にでてきた子もでてくるよ。

ウォーロック：早くヤツと戦わせろ！

うん、要望どおり戦わせますよ。

2人：？！

サテラポリス遊撃隊再結成（前書き）

家に帰って寝るスバル。

寝れなかったり、色々あったがまあ寝る。

次の日、宿題をやっていると暁から呼び出しのメールが来る。
スバルは、サテラポリスへ。

サテラポリス遊撃隊再結成

電波変換して、周波数を変えウェーブロードの上に乗る。

そうしてまた周波数を変え、スカイウェーブのさらに上空に浮かぶ電波コスモウェーブへ。

サテラポリスのウェーブロードへ降りる直前、スバルは足を止め、空を見る。

「ココから見る地球は、いつもきれいだな。」

《そりゃ、宇宙の電波だしな。》

普通の人であれば絶対に見ることの出来ない情景。

宇宙飛行士であれば見ることは出来るだろうが、それは何年も月日がかかってしまう。

「さてと、急がなきゃ。」

そうして、コスモウェーブを駆け下りていった。

サテラポリス日本支部、そこには一緒にWAXAもある。
ある場所は、富士山火口。

電波変換をとき、その地に降り立つスバル。

「おそ〜い。」

「すみません！」

そう言いながら、走って暁いるサテラポリスの玄関まで行く。
そうして、スバルと暁は中へ入っていく。

中はいつもの雰囲気が漂っていた。

奥へ奥へ、そしてエレベーターに乗り、いつもの階まで行く。エレベーターが上まで上がり、そしていつもの階で止まる。

扉が開き、部屋へ。

「皆！」

「スバル君、おそ〜い。」

ミソラからスバルの知っている中での、電波変換できる人たちが集まっていた。

中には、メテオG事件の時スバルたちと敵対していた彼らも…。

「暁、遅い。」

「うるさいな、言うならスバルに言ってくれ、クインティア。」

「もしかして、姉ちゃん怒ってる？」

「ジャック…。」

「へーい。」

そんなこんな、懐かしい再会。

クインティアとジャック、あのときから変わってはいなかった。

そんな事にスバルは、ホッとする。

ミソラはなんだかんだで、久々に合ったジャックにしがみついている。

ゴンタも居て、ミソラとジャックとで何かを話している。

クインティアは暁と、宇田海は遊撃隊の技術部の人と、そしてそん

な中スバルよりも遅れてきたもの3名いた。

スバルも知っている3人。

エレベーターが上がってくる。

そんな事など知ることのないスバルやゴンタやミソラは変わらず話している。

「チーン」という、エレベーターの到着音とともに、扉が開き遅れてきた3人が入ってくる。

「おつ、きたか。」

そう暁が言い、彼らの方向を向く。

それに釣られるかのように、スバルたちもその方向を向く。

「スバル君、僕も手伝うよ！」

「けっ、子供だらけじゃないか。」

「頑張るチヨキ！」

緑の髪をしたスバルには懐かしい顔、そしてもう一人はコダマ小で庭師をしているぶらつきぼうな人、そして語尾につく言葉が特徴的な彼。

スバルは、彼らの顔を見た瞬間に驚きの表情を見せる。

それと同時に、嬉しさもこみ上げてきた。

「ツカサ君！それに、尾上十郎さんに千代吉君も！」

「ボウズ！俺たちに出来ることであれば手伝っぜ！」

そんなところに、ヨイリー博士が入ってくる。

相変わらずの様子である。

ヨイリー博士が入ってくると、皆博士の方向を見、そして背筋を伸ばす。

「皆そろってるわね、やる気満々じゃない、シドウちゃん。」

「あはは、まあやる気のあるやつらばかりですよ。」

そうして、ヨイリー博士からあの名前が発される。

「もう一度、ココにサテラポリス遊撃隊を結成するわ。今回は新たに数人メンバーも増えて楽しくなるわよ。」

「てわけで、皆頼むな！」

サテラポリス日本支部内に大きな歓喜とともに、皆の心に不安が出てしまった。

「戦う」ということに対しての何かだろう。そんな中、ヤツは外にいた。

富士山火口上空 数十メートル地点

「さてと、言う事聞いてくれそうにないな。」

あの、コダマ小で突風を吹かせた電波体が一人眩いている。すると、その肩に小さな鳥が止まる。

そして・・・喋り始めた。

《それが、私たちが大天狗様からかせられた今回の命令です。》

「だからといって、聞かないやつにまた言うのもな。」

《もう・・・。》

「ちゃんとやるさ、大丈夫。」

《あなたという人は、めんどくさがりなのか真面目なのかはつきりしてほしいです。》

「どっちも良いじゃん。」

突風を吹かせた電波体のほうは、ふざけている。

烏の方は真面目だ。

そして…。

「忠告を無視するようであれば…やっていいんだよな?。」

《ええ、そう大天狗様も仰っていましたし…。》

「うし、じゃあ…。」

その声とともに、電波体の後ろが一瞬にして黒くなる。
それは何かの集まりのよう。

「忠告しに行きますか。」

その頃、サテラポリスでは……

サテラポリス内に、警報音が鳴り響く。
そして、放送になる。

『サテラポリス上空数十メートル地点に、不思議な電波体が何か黒いものを引き連れています！』

その放送がなり終わると、暁から遊撃隊の全ての人に命令が出された。

「よし！皆、出撃だ！」

サテラポリス遊撃隊再結成（後書き）

今日はコレでおしまい~~~~><

スバル：今日も一回だけだね。

ウォーロック：どうしたんだ？ネタ切れか？

違うわい。

小説書いてる途中に、ネタ考えるから浮かぶまでに時間がかかったり。

スバル：ふう〜ん。

天牙：まあ、次回は「忠告と始まり」ってタイトルらしい。

スバル：どういうこと？

天牙：さあ〜な。

感想よろしく願います！

忠告と始まり（前書き）

サテラポリスに呼び出されたスバルが目にしたのは、電波変換できる人々の集まりだった！

ツカサ・十郎・千代吉、そしてクインティアとジャック。

こうして、サテラポリス遊撃隊が再結成された。

その直後、サテラポリス上空の電波で不振な電波体が現れる！

忠告と始まり

スバルにとって、久々の戦い。

もちろん、暁たちにとってもそうだ。

全員、サテラポリス内を走って外にでる。

玄関ドアが開き、暁たちが外へ。

「でて来い！」

そう、スバルが言っているとヤツは、スバルたちの目の前に降り立ってきた。

その大きな黒い翼を広げて。

「言われたとおり、出てきたぞ。」

変わらない顔の色と鼻、そして眉毛とひげ。

明らかに奴は、コダマ小で突風を吹かせた犯人であった。

「たつく…先に下りて忠告しようと思ったのに、呼び出されちゃったよ。おおおお。」

ヤツは頭をボリボリかきながら、何かへんなことを言っている。

かなり、めんどくさそうだ。

だが、そんなそぶりを見せるヤツに対し、スバルたちは以前として警戒している。

ヤツはチラッとスバルたちのほうを見て、少し哀れんだ表情をしながらスバルたちに向けて話し始めた。

「第一、何でそんなにも電波変換できるやつら集めてるんだ？私ら

にでも対抗するつもりか？」

その言葉に、暁たちは驚く。

ヤツは、暁たちの考えていることを全て見抜いていたのだ。

「な…なんで、僕たちの考えてることが…。」

スバルがヤツにそういう。

他のメンバーも同じ表情でいる。

すると、ヤツはかなりめんどくさそうに「一々説明するのがめんどくさい」などといいながら、説明を始めた。

「ココに来た瞬間、風がそう言っていたからさ。」

「おい、てめえそりやどいうことだ。」

「言ったとおりの意味。風は全て知っている、人の事も妖怪のことも全てな。それを私は聞き取ることが出来るだけ。お分かり？」

《こいつ、おちよくってやがるのか、なめやがって…。》

そんな言葉が、ウォーロックたちの口から発せられている。

ヤツは、そんなウォーロック達を無視し、忠告を始めた。

「まあそんなことはどうでもいいや。私はお前らに忠告しに来ただけだし。」

「どついつことだ。」

「ああー！人間って奴はめんどくさい生き物だ。めんどくさい、こ

うなりや単到直入に言う、お前らは邪魔するな。」

その言葉に、遊撃隊全員が同じ反応をした。

「おい！どついうことだ（なんだ）！」

「お前らが首を突っ込むとややこしくなるからだ。分かる？」

ヤツのそのものの言い方と言葉に、とうとうウォーロック・コーヴアスの堪忍袋の緒が切れた。

二体はでてきて、ヤツに反論し始める。

《おいてめえ、それは聞き捨てならないな。》

《さっきから聞いてりゃ、わけわかんねえことばかり言いやがって。》

「おお、怒った怒った、ウシシシ。」

《からかいやがって…。》

すると、ヤツは咳払いし、また話し始める。

「まあいいや、一応聞こう。」

「なんだ！」

「お前らは私たちの邪魔をするのかしないのか、どっちだ？」

その言葉に、遊撃隊全員が同じ言葉を大声でヤツにむけて言った。

「『邪魔する！貴様らの野望を止めるんだ！』」

ヤツは哀れんでいた。

両手を肩まで上げ、首を横に振りながら。

そして…。

「分かった、じゃあ…。」

右手に日本刀らしきものを出し、ヤツは暁たちの方向へその刃を向け言葉を放つ。

「手加減してやる！ただし、本気でかかってきな！」

その言葉と同時に、暁たち全員が腕にハンターを取り付け、叫んだ。

「『トランスコード！』」

こうして、戦いは幕をあけてしまったのであった。

忠告と始まり（後書き）

本日一回目の更新終了。

スバル：ねえ、あの妖怪の言ってたセリフ。

あれは、東〇のあるキャラクターのセリフを、ちよいともじったものです。

これがないや…って思ったので。
神主様申し訳ないです。

ウォーロック：それってダメなんじゃ。

書かれてあるから大丈夫だと思う。

〇〇から引用的な感じでさ。

スバル：ダメだったら？

…考え直す。

天牙：そんなこんな、次回はスバルとヤツつてのが本格的に戦うよ。
。

スバル：どうなるんだろうか…。

次回をお楽しみに（たぶん今日中には更新します）

遊撃隊VS風を操りし妖怪（前書き）

遊撃隊結成直後に舞い降りてきた謎の電波体。

ヤツは暁達に「私たちの邪魔をするな」と忠告するやいなや、「私たちの邪魔をするかしないかどっちだ？」と聞いてくる。

それに対し暁たちは邪魔をする・お前たちの野望を止める！と言う。そして、ヤツと暁たち遊撃隊の戦いは始まる。

遊撃隊VS風を操りし妖怪

電波変換をすませた暁たちは、一斉にヤツ目掛けて攻撃を仕掛ける。だが、ヤツはその場を動こうとしない。

それどころか、自分の名前を名乗りだしたのだ。

「そついやまだ名乗ってなかったな。

私の名はフェザー・コーヴアスって言うんだ。

十分楽しませてくれよな！人間どもよ！」

そうヤツが言った直後、暁たちの攻撃によってヤツの回りに煙が立ち込める。

誰しもが、「やった！」や「こんなにも簡単に！」と思った。

煙が晴れ、フェザー・コーヴアスの姿が見える。

だが、フェザー・コーヴアスはその場に平然と立っていた。

アシッド・エース達は驚きを隠せない。

「私は風を操ることが出来る。大きなものから小さなものまでな。」

「まさか、ただの風で僕達の攻撃を全て……。」

「そつ、防ぎきった。」

「う……？だろ。」

「マジ……か。」

誰もが驚きを隠せない、その強さ。

だが「たった一度の攻撃じゃまだ分かん」とアシッド・エースは

皆に言う。

その言葉を皆信じ、フェザー・コーヴァスに向けて猛攻撃を仕掛ける、仕掛け続けた。

フェザー・コーヴァスは、以前としてその場一步も動かない。攻撃が当たり続ける。

「そろそろやったか？」と思い、攻撃を止めた瞬間だった。あたりにものすごい暴風が、吹き始めたのだ。

「クッ・・・！」

「耐え切れるかな、ニヤハハ。」

笑っている、フェザー・コーヴァス。

その表情は余裕だ。

突風によって身動きの取れないアシッド・エースたち。

ロックマン、オックス・ファイア、ハーブ・ノート、ジャック・コーヴァス、クイーンヴァルゴ、皆動けないで、その場で耐えている。その中で、フェザー・コーヴァス以外にも笑っているやつがいた。

「アシッド、そろそろ解析終わる？」

《ええ、あと5秒ほどで。》

「とにかく、これであいつに一発食らわせれるか。」

アシッド・エースだ。

その顔には少しだけ、回りとは違う表情がでていた。

「勝てる」という表情だ。

フェザー・コーヴァスはそんなアシッド・エースに向けて話す。

「私に一発食らわせることができる？ふうん…。」

「おかしいか？」

「ニヤハハハハハハ！おかしいよ！食らわせるものなら食らわせてみな！」

「言っただけいつ、なめやがって。」

それと同時にアシッドから解析終了の言葉が暁に告げられる。背中から赤色のものが噴出される。

「おっ？なんだなんだ？」

「食らつとけ！」

アシッド・エースが少し体勢を低くする。

フェザー・コーヴアスは以前としてその場を動かないまま、アシッド・エースの方を見ている。

ロックマンたちがアシッド・エースに向けて、叫ぶ。

「っっっいつけーーーーー！」「っ」

それと同時に、アシッド・エースがやつ向けて、兆速で突進する。

これはヤバイと言わんかのような顔をする、フェザー・コーヴアス次の瞬間、またまた煙が立ち込めた。

突風が止み、煙が晴れてくると、中に立っている二つの影。

ロックマンたちは、どちらが勝ったのか緊張していた。

煙の中から声が聞こえる。

「ケホケホ、危ない危ない。」

勝ったのは…。

「？…だ…ろ。」

フェザー・コーヴアスは暁の真上で余裕の表情のまま、飛んでいる。アシッド・エースは、フェザー・コーヴアスがいた場所で立っている状態。

勝ったわけでもなく、ただフェザー・コーヴアスがアシッド・エースの攻撃を避けただけ。

「今度はこっちの番だ。覚悟しとけ。」

「ッ！」

「いでよ！エドギリ！」

そう、フェザー・コーヴアスが言うと両手にエドギリブレードらしき剣が出てくる。

けれども、それは何処からどう見ても、ただの日本刀にしか見えな
いものだ。

それを両手に握り、ヤツは消える。

「消えた」「どこか行った」と思った瞬間、フェザー・コーヴアスはアシッド・エースの目の前に現れ、目に見えない速さで斬りつける。

そして、またフェザー・コーヴアスは消える。

次に姿を見せたのは、空。

「これで、終わりだ。手加減したつもりなのにな。」

そう、フェザー・コーヴァスが言う空が一瞬にして黒へ染まる。
驚くことしか出来ないロックマンたち。

攻撃を食らったアシッド・エースは、その場にそのままの姿で膝を
地面につかせていた。

「曉さん！」

ロックマンが、アシッド・エースに駆け寄る。

その瞬間、空は青へと変わり、ロックマンたちのいる地面は一瞬に
して黒へ染まった。

そうして、地面はまた元の色に変わった。

だが、遊撃隊でフェザー・コーヴァスと戦っていた彼らは、地面に
ふせられていた。

「さてと、分かったか？お前たちの今の實力じゃ、私たち妖怪には
かなわない。」

「……強い。」

遊撃隊全員がそう言った。

圧倒的な強さ、それは圧倒的な實力。

誰もがフェザー・コーヴァスに攻撃をあてられないまま、終わった。

「さてと、命令はちゃんとこなしたし、帰ろう帰ろう。」

「ま…待て！」

そう、ゴンタが言うのも遅く、フェザー・コーヴァスはどこかへ消
えていった。

そのあと、遊撃隊の隊員全員は医務室へ運ばれ、治療を受けた。
結局、フェザー・コーヴァスの圧倒的な強さとスピードに誰もがかなわないまま、遊撃隊再結成後最初の敗北となった。
ウォロックとコーヴァスにヴァルゴ、ウィザードたち全員に遊撃隊全員が口をそろえてこう言った。

「たった一人の電波体に負けるなんて・・・。」

遊撃隊VS風を操りし妖怪（後書き）

今日の更新はコレにて終了！

ふう、なんか滅茶苦茶だった気がする。

スバル：フェザー・コーヴアス強すぎ！

いや、だって・・・。

ウォーロック：問答無用！スバル、やるぞ！

スバル：うん！

えっ、あの・・・ちょ・・・ウェーイ！

（ロックマン、作者に向けて攻撃中）

天牙：まあ、あいつらはほっておこう。

今回は、まだ特にきまってない。

ルナ：この作者は、本当に後先考えないで書くからね。

ミソラ：感想よろしくお願いします！って作者さんが言ってたよ。

地底にある古きモノ達（前書き）

フエザー・コーヴアスと戦い、負けたスバルたち、遊撃隊。
サテラポリス内の医務室で治療を受けている。

そんな間、日本の地下深くでは恐ろしいことが起こっていた。

地底にある古きモノ達

スバルたち遊撃隊がフェザー・コーヴァスに負けた少しあと、日本の地下深くでは妙なものがざわめいていた。

時刻は夜。

それは、地上に聞こえることなく、地上へ這い上がってこようと。おぞましい声が地下中に響く。

それは止まることなく、何かを求めているかのよう。

「「「ヴァアアアア！！！」「」」

「「「グオオオオオオオ！！！！」「」」

「「「ガアアアアアア！！！！」「」」

同じ叫び声でなく、別々の叫び声が何度も重なり、何度も響きあい、時間が立つにつれおぞましさを増していく。

何を言っているかさえわからない叫び声。

けれども、何かを求め、地上へ這い出そうと大きな地の板を砕こうと必死に叫ぶ。

「「「ガアアアアアミアアアアガアアア！！！！」「」」

「「「ウオオオオオオオオバアアアアアアヴァアアア！！！！」「」」

「

奴らが、地下深くにある空間で叫んでいる間、フェザー・コーヴァスはというとある山の近くにある社にいた。近くには大きな人のような影。

「はあゝ・・・こちらの忠告は、一切聞かないようですよ。」

そう、フェザー・コーヴァスは大きな影に向けて話す。

大きな影は、フェザー・コーヴァスに背を向けたまま、立っている。

「あゝ、聞いてますか？」

すると、大きな影はその声でフェザー・コーヴァスの方向を向く。そいつは、フェザー・コーヴァスより大きく、袴のような和服を着ていて、腰には葉団扇を下げ、腕組みをし、深刻そうな顔で立っている。

耳は尖がっていて、顔には大きく立派な髭を生やし、その顔には長い鼻、背中にはフェザー・コーヴァス以上に大きな黒い翼を持ち、頭にはフェザー・コーヴァスと同じ小さな頭袴ときんを被っている。

袴のような服装は、フェザー・コーヴァスに似ているものの、所々が明らかに違っている。

「さっきも言いましたが、あの人間達はこちらの忠告を、一切聞かないみたいです。」

そう、フェザー・コーヴァスが言うと、ヤツは話し始める。

「そうか、やはり自分たち中心のような考えなのだな、フェザー・

コーヴァスよ。」

「うーん、なんか妙なことをやつらは考えてるみたいですよ、大天狗様。」

「まあ、なににせよお前が、大きな風を吹かせてくれたおかげで、あのお方々は気がついてくれたようだ。」

「それは何よりです。」

そう話しながら、愉快に笑っている二人。それから少しして、大天狗が話し始める。

「それより、地下の方はどうだ？」

「地下の方ですか、実は……。」

……

「……そうか。」

「いかがいたしましょうか。」

「八百万の神々に仕えている妖怪たちが、どうにかするであろう。」

「私も……しなきゃならないですよね……。」

ものすごいめんどくさそうな声で、そうフェザー・コーヴァスが大天狗に問うた。

大天狗は、その質問に首を縦に振る。

「まあ、これが私の運命ですし、邪魔する人間と一緒にやっておきますわ。」

「頼んだぞ。」

「任せといてくださいな、あんな奴らただの石ころと同じですし。」

「その余裕が、仇になら^{あだ}ないことを祈っておるよ。」

そう二人は会話をし、この日は空へ分かれていった。

それから数時間後、地下からは何千・何万ものの奴らが地の板をすり抜け、地上へ這い上がってきた。
そのおぞましい声を、電波世界で響かせて…。

地底にある古きモノ達（後書き）

というところで、今日一回目の更新終了！

スバル：この回は僕たちの登場無いね。

たまにはこういうのも入れなきゃさ。

ミソラ：それより、なんで昨日更新しなかったの？

それは……。

天牙：作者たちの相手するのがめんどくさいから、次回の情報を言うぜ。

ウォーロック：次回はなんかヘンなやつらと俺たちが戦うらしい。

天牙：また戦闘回かよ。

ウォーロック：オレは嬉しい。

天牙：私は家で宿題だ。めんどくさい。

ルナ：感想よろしくです！ついでに評価も……！って、作者さんが言ってたわ。

全てはここから（前書き）

奴らは日本の地下深くにある空間で叫んでいた。
しばらくして、奴らはその声を響かせながら、地上へ這い上がって
きた。

フェザー・コーヴアスは、ある山にある社で大天狗と話をしていた。
なにやら大きなことが始まるかのような雰囲気です。

そして、地から這い出てきた奴らは、糧^{かて}を求め…

全てはここから

治療が終わったスバルたちは、暁の部屋でのんびり話をしていた。外で起こっている事など知らないまま…。

暁が袋の中に入っている大量のうまい棒を一本一本取り出し、皆に渡していく。

顔はにこやか、だが心の中はいつも以上に落ち込んでいる。

「にしても、本当あんなやつに俺たちが負けるなんてな…。」

うまい坊の袋を空けながら、そんな事を言う暁。

それは、部屋に居る遊撃隊の皆が思っている事であった。

たった一人の電波体に負けた、コレによる屈辱は測り知れないものである。

現にウォーロックたちは、ハンターの中でもの凄く落ち込んでいるのだ。

「それにしても、あいつ自分の事を「フェザー・コーヴラス」って言うてましたね。」

スバルが片手にうまい棒を持った状態で、暁に言う。

暁はうまい棒を口にくわえている状態で、スバルのその言葉に反応する。

「フガフガフガガ…フガフガフガフガガ…。」

「暁、食べ終わってからにしないで。」

「フガ。」

そうクインティアに言われると、口をモグモグさせる。そんな暁を見て、呆れて顔に小さな汗を流すスバルたち。彼らしい、ポジティブな行動だ。

ゴンタやミソラは彼のそんな、行動を面白おかしく笑っている。少しだけ、皆の心の中が和らいでいく。

そんな時、またサテラポリス内にサイレンが響く。

今度は、もっと大きな音で。

その音で、一斉に暁たちは立ち上がる。

「何事か！」といわんばかりに、サテラポリス内が一瞬にして騒ぎ立つ。

暁を先頭に部屋に居た遊撃隊全員が廊下にでて、ヨイリー博士のもとへ向う。

「何事ですか、ヨイリー博士！」

ヨイリー博士の居る部屋につくと、廊下以上に騒ぎ立っていた。WAXAの職員が急ぎ急ぎに部屋中を駆けめぐっている。

その間と間をすり抜けて、ヨイリー博士の下までたどり着く。

すると、博士は顔を真っ青にして、腰を床に落としていた。

暁がヨイリー博士に、話しかける。

「何があったんですか。」

「ああ、シドウちゃん。実はね……。」

長官の手を借り、立ち上がるヨイリー博士。腰に手を当てて、痛そうにしている。

「もの凄い数の何かが、ある島の地下から出てきたのよ。」

「それは、何なのですか？」

「ウィルスのようにウィルスじゃないのよね。今までに感じたことのない何か。言うなれば、フェザー・コーヴァスちゃんのような感じかしら。」

「妖怪…。」

「しかも奴らは、電波世界をつたって、色々な都市・村・町に向って行ってるわ。」

暁は、ヨイリー博士のその言葉を聞き、遊撃隊全員に大声で命令を出した。

全員に伝わるように、ハンターをとうしてだ。

「遊撃隊全員、およびサテラポリス隊員全員に言っ！各地にいる人々を守れ！急いでだ！！」

その声を聞いた、隊員は急いで各地の町へ出て行った。

「シドウちゃん、あと言い忘れてたんだけど…。」

「なんですか、博士。」

「そのやつらの中に、フェザー・コーヴァスちゃんのは無かったわ。」

「了解です。」

そうして、暁はスバルたちを連れ、別の場所へ移動をし始める。
移動した場所は、屋上。

そこは、中からの音が聞こえるものの、いたって静かだ。
屋上に全員が入ると、暁は話し始める。

「よし、じゃあ言っぞ。」

「「「はい!」「」「」

「これから皆には各地に散らばって、奴ら…妖怪のデリートに当たってもらふ。その際、もしフェザー・コーヴアスを見かけても、無視してくれ。」

ウォーロックがハンターから出てきて、その発言に質問し始める。

《なんで無視するんだ。》

「理由は簡単だ、今の俺たちじゃいくら群れて立ち向かって、あいつには勝てない。」

その言葉に、誰しもが反論することは出来ない。

言われたとおり、暁たちは一度、しかもこの日にフェザー・コーヴアスに負けている。

「今、やつに立ち向かって勝てない」そう分かっている暁は、だからそういったのだ。

「ということは、僕達は奴ら、フェザー・コーヴアスを除いた妖怪にのみ集中すれば良いんですね。」

「そのとおりだ、スバル。要するにだ、無茶な戦いはするな。」

「で、暁。私たちは何処へ散らばるの。」

「それに関してだが、アシッドが決めてくれたみたいだ。えっと、少し待ってくれ。」

こうして、アシッドから自分達の行く場所を教えてもらったスバルたちは、電波変換し各地へ散らばっていった。

スバルはコダマタウンを、ゴンタはヤエバリゾートを、ミソラはベイスайдシティを。

誰もが、予想外の出来事を把握できないまま、全ては始まった。

全てはここから（後書き）

更新できないとか言ってたけど出来た！

私、お見事！

そして、ようやく3話終わった！

天牙：スバルたちが忙しいみたいだから、今日は私が天馬の相手だ。

やあやあ、天牙。調子はどうだい？

天牙：いつもどおりだ。そういう天馬はどうなんだ。

私もいつもどおり。

天牙：そうか、まあんじゃ次回予告だ。

次回から、本格的に始まりです！

ココまでは序章に過ぎません！

天牙：らしい。内容はやっぱり戦いらしい。

第一章とでも言おうか。

まあ、名前こそ決まってるけど、よろしくお願いします！

人という名前の餌（かて）（前書き）

暁の部屋でのんびりする、スバルたち。

うまい坊を食べたりと、少しグダグダだが、心の中は不安でいっぱい。

そんな中、地下から這い上がってきた奴らが、各地の町や村へ行き人々を襲い始める。

暁たち遊撃隊は、急いで各地の町や村へ移動していく。

人という名前の餌（かて）

ウェーブロードをつたい、自分たちに任せられた町まで移動する。道中にも、妖怪が沢山居た。

それらもデリートしながら、町へ。

《今回は、委員長たちだけじゃないな。》

「町の人皆を守らなきゃならないんだ、いつも以上にやらなきゃ…。」

《スバル！そろそろ、コダマタウンだ！やるぞ！》

「うん！」

コダマタウンへ着くと、そこには衝撃の風景があった。

予想以上の状態、それは逃げ惑う人々を数え切れないほどの妖怪が襲っている情景。

バトルカード・バトルウィザードなどで、対処はしているが対処しきれていない。

サテラポリスの人や勇気ある人が、何とかして守っている。

けれども、やはり対処しきれていない。

恐怖に怯え、耳を塞ぎ、目を閉じてうずくまっている人もいる。

中には、襲われて怪我をし、血を流している人までもが、たくさん。

《こいつはひでえ…。》

町中のいたるところから、聞こえてくる悲鳴。

それは、明らかに助けを求める叫び声。

「『『『『助けてよー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』』』』」

「『『『『ウワアアアアア！ー！ー！ー！』』』』」

頭の中で予想していたもの以上に、恐ろしい状態。
ロックマンの足は、恐怖のあまり動こうとしない。

ウォーロックが、動くようにハンターの中から促している。
その声も、恐怖のあまり震えている。

《おい！スバル！》

「分かってる！」

無理やり足を動かし、町の人々の周りにいる妖怪を、ロックバスターで一匹一匹倒していく。

だが、それは虚しくも弾かれ、弾が当たった妖怪の目はロックマンの方へ向く。

少し黒ずんだ赤い瞳、恐ろしい牙、恐ろしい腕と爪、異様な形。
ロックマンは、そんな妖怪に見られた瞬間、恐怖のあまり動けなくなってしまった。

妖怪は奇妙な形の口で、喋りながらロックマンを襲ってくる。

「ヒトノニクをクレー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「ひい！ー！」

バスターを構え、打つ。

弾は見事に、妖怪に当たる。

そうして一匹だけ、崩れ落ち消えていった。

死んだのではなく、消えていったのだ。

「…消えた。」

水が蒸発するように、消えていったのだ。

消えていった妖怪の居た場所には、血が一滴も落ちていない。

《電波体になってやがるのか。》

「こ…怖かったー！」

《うつせー！俺たちがやらなきゃ誰がやる！

応援を待つとしても、暁たちのやってる場所も同じ状況だ！

いつもどおり、ウイルス倒す感覚でやれば大丈夫だ！》

「…えっ？今なんて…？」

少しとぼけるスバル。

外に出てきているウォーロックを見つめて。

そんなスバルの反応に、ウォーロックは声を震わせながら答える。

《だから、いつもウイルス倒す感覚でやれば良いだろ。こいつらは電波体になってやがるんだ。》

「そうか…！ありがとう！ウォーロック！」

《そうだ、いつもどおりで良い。精一杯、手を抜くことなくな！俺もやるからよ！》

そうして、先ほどよりも速やかにあたりにいる妖怪を一掃していく。

ウォーロックはビーストスイングで、ロックマンはバトルカードを駆使しながら。

だが、それでも妖怪の数は一向に減る様子はない。

けれども、少しだけ希望が見えた瞳で、妖怪を一掃していく。

そんな中人ごみの叫び声から、ひとつの声が聞こえた。

スバルがいつも聞いている、彼女の声だ。

彼女は、周りにいる人に気がつかせるため、精一杯大声で叫んでいる。

「ロックマンよ！！！！ロックマンが着てくれたわ！！！」

その声は、次第に周りの他の叫び声を消していき、人々に希望を与えていった。

「もう、委員長声大きいんだから…目立ちたくないんだけど…」

《うるさい、こんな状況だ。俺たちで希望を見せてやろうぜ！！》

そんな事を言うウォーロック。

だが、そのとおりなのだ。

三度の危機から、地球を救ったヒーロー。

彼なら、人々に希望を与えることが出来る。

少し嫌な顔をしながらも、ロックマンはルナに感謝していた。

人という名前の餌（かて）（後書き）

というところで今日は終わり！

今日はスバルも…というか皆忙しいみたいだから、誰もいないな。

フェザー・コーヴァス：私がいるけど…。

おお、フェザー・コーヴァス何で来たの？

フェザー・コーヴァス：いや、来た方が良くって。

？付け。本当は”ついで”だろ？

フェザー・コーヴァス：うぐぐ、そのとおりだ。

さてさて、次回はコレの続きです！

フェザー・コーヴァス：第一章の名前決まったんだな。

まあな。

感想or評価よろしくお願いします！

究極変身再び　そして…（前書き）

コダマタウンに着き、怖がりながらも大量に現れた妖怪達を倒していく。

妖怪たちが電波化していることに気がつく、そこから妖怪退治はスムーズに。

そんな時、人ごみの中からルナの声が聞こえる。

その声は周りの人に伝わり、やがては希望を与えていく。

ロックマンはその期待に応えるため、ウォーロックと共に妖怪たちを倒していく！

究極変身再び　そして…

妖怪たちを倒していくロックマン。

ルナと周りの人の声援により、その速度は加速していく。

減ることがなかったかのように見えた妖怪達が、みるみるデリートされていつている。

ルナのたった一言が、混乱している人々を落ち着かせ、ロックマンに力を与えたのだ。

《スバル！ここいらで一氣に終わらせちまえ！！》

そう言つて、外に出てきていたウォーロックがハンターの中に戻っていく。

ハンターの中にウォーロックが戻ると、画面にホップアップが出てくる。

それは、数刻前に暁から渡されたものであった。

数刻前のサテラポリスの屋上

「スバル。」

そう言つて、暁が電波変換しようとしているスバルを呼び止める。
スバルは呼び止められたことを、少し不思議に思いながら暁の前まで行く。

「どうしたんですか、曉さん。」

「ああ、いやそのだな。」

言葉を詰まらせる曉。

言おうか言わないか悩んでいるような顔だ。
数秒だけ間を^まあけ、再び話し始める。

「お前にもう一度、エースPGMを任せておこうと思ってな。」

「えっ?!」

驚きを隠せないスバル。

というのも、メテオG事件以降に一度エースPGMはサテラポリスのほうに返していたのだから。

だが、スバルの顔には、既にその言葉への答えが出ているのだった。

「僕でよければ!」

「そうか、そう言ってもらえて良かった。まあ、今回は状況が状況だし、使っても良いからな。」

「分かりました。」

こうして、スバルはエースPGMを受け取り、コダマタウンへ移動したのだ。

画面の隅に移っているノイズ率は200%を超えている。

そして、そんな画面のど真ん中には「メテオサーバーアクセス」と、ローマ字で書かれたポップアップが出ている。

次の瞬間、ロックマンは宇宙^{そら}高くにある、アレの残骸にとどくように叫んだ。

「ファイナライズ!!!」

すると、ロックマンを覆うように、赤いものが包み込んでいく。

それが晴れたときには、ロックマンの姿は変わっていた。

漆黒のボディに、漆黒の羽。

その羽からは、高濃度の紅いノイズが噴出されている。

自我は…保っている。

《スバル！一気にやれ！！》

そう、ウォーロックに言われると、ロックマンは右手から黒く小さな球体を出す。

そして、その手を上にあげ、振り下ろすと、辺りは黒に覆い隠される。

すると、あたりに居た妖怪たちはその中心部分へ吸い込まれていく。

妖怪たちのおぞましい声が、まばらに散らばり、それはやがて吸い込まれていく場所へ。

「ブラックエンド…」

そういうと、その場から一瞬消え、もと居た場所の反対側へ出る。

「ギャラクシー！」

その言葉と共に、あたりには眩い光が散る。

目を手で押さえておかなければ、目がおかしくなるほどの光。

その光が納まると、コダマタウンからは妖怪はいなくなっていた。

人々の口から、歓喜の声が溢れる。

涙を目から零れるほど流し、お互いに抱き合っている人。

人々に希望を与えたルナは、そばに居たキザマロと一緒に地面に崩れ落ちていた。

周りに居たサテラポリスの隊員たちは、人々の怪我を手当てするため、乗ってきた車から治療道具をセッセと運び出し、怪我をした人の場所へ行った。

そんな中、ロックマンは何かを感じ、今さっき居たウェーブロードよりはるか高いウェーブロードにいた。

「何でお前が…。」

「別に良いじゃん、ただ見てただけなんだし…。」

そう、やつだ。

暁から「出会っても戦うな」と言われているやつだ。

「にしても、よくやったもんだ。あれほどの妖怪たちを相手にしても怯まないなんてな。怯えてたら、手伝ってやろうと思ったんだが、そんな気持ち必要なかったようだ。」

《てめえ、何で見てやがった。》

「見てただけさ、ただお前らの本当の实力が知りたくてな。」

一度会ったときと同じ調子で、フェザー・コーヴァスは喋っていく。余裕満々のその言葉、ウォーロックの中には「やるな」と言われていても、やりたい気持ちでいっぱいだ。

そんな時、フェザー・コーヴァスがロックマンに話し始める。

「そんなことより、こんなところで油売ってて良いのか？お前さんの仲間が応援を求めてるぜ。」

その言葉で我に戻るロックマン。

急いで他の遊撃隊のところへ向おうと、周波数を変えようとする。だが、そんなロックマンをまたもやフェザー・コーヴァスが止める。

「おい、ちょい待ちな。」

「なんだ！急いでるのに！」

「助言だ。一部の妖怪つてのはな、光に弱いもんだ。今日の天気は曇りだからな、光がない。」

そんな事を言うと、フェザー・コーヴァスは風のように何処かへ消えていった。

「光…。」

《何言ってやがるんだ、あいつ。とにかく行くぞ！スバル。》

「えっ、あっうん！」

そうして、ロックマンは他のみんなのもとへ移動していった。
フェザー・コーヴァスの助言を、頭の隅のほうへ置きながら…。

究極変身再び　そして…（後書き）

今日の更新終了！！！！

時間ギリギリだああああ！！！！

フェザー・コーヴァス：お疲れ、明日も頑張れよ。

うん、頑張るわ。

フェザー・コーヴァス：で、時間が無いようだから早々言っが。

ん？何、フェザー・コーヴァス。

フェザー・コーヴァス：今回はどんな内容だ。

あつ、ああ。

今回は、スバルが遊撃隊（電波変換メンバー）の誰か一人のところへ行く感じ。

フェザー・コーヴァス：ミソラか？それともゴンタか？それとも、
暁か？

それは考え中…。

もし、「〇〇のところへ行つてほしい！」とかあればコメントへ。
意見が多かったら、多数決で決めますので。

フェザー・コーヴァス：だそうだ。感想 or 評価よろしくな！

そして平和な日々へ（前書き）

暁から、コダマタウンへ出発する直後に貰ったエースPGMにより、
ファイナライズ究極変身したロックマンは、ノイズフォースビッグバンNFB・ブラックエンドギャラクシー
を使い、あたりにいる妖怪を全てデリートした。

町中歓喜に包まれた中、ロックマンはコダマタウン上空のウェーブ
ロードでフェザー・コーヴアスに会う。

色々話し、フェザー・コーヴアスがロックマンに他の仲間が応援を
待ってるというと、ロックマンは他の仲間のところ向けて行こうと
する。

だがそれを止め、助言をするフェザー・コーヴアス。

その言葉を聞き、再びその足を仲間の誰か向けて歩み始めるロック
マン。

そして平和な日々へ

ブラック・エースの状態からノーマルの状態へ戻り、ウェーブロードをつたい、移動するロックマン。

地上からは何処からとも無く、人々の叫び声が聞こえてくる。

無意識の内に、耳を塞ぎたくなるほどだ。

今にも逃げ出したい気持ちが入みあがってくるのを押さえ、ロックマンは仲間のもとへ飛んだ。

着いたのは、日本のとある場所。

辺りには木造の家が立ち並び、周りに見えるのは山ばかり。

そんな場所で、ロックマンは彼を見つける。

彼は、数十人の隊員と共に町の人を安全な場所へ誘導しながら、妖怪達と戦っている。

こんなことが出来るのは、遊撃隊でただ一人。そう、アシッド・エース―暁だ。

彼は声を張り上げて、町の人を誘導している。

「こつちに逃げてください！！速く！！！」

その声の聞こえた町の人たちは、妖怪たちから逃げるように暁たちの後ろのほうにある建物の中へ入っていく。

ロックマンは、そんな状況の中心部分に立っている暁の隣に降り立つ。

「アシッド・エース！」

「おお、ロックマン来てくれたか。」

左腕をバスターに変え、アシッド・エースのように妖怪をデリート

していくロックマン。

二人の顔は、真剣そのもの。

前に迫ってくる町の人よりも前に出て、それを追いかけてくる妖怪たちをデリートしていく。

既に、後ろにあるでかい建物の中には、町の人々が次々と入っていく。そんな時、ロックマンたちの前で一人の子供が足を滑らせ、こけてしまう。

妖怪がすぐ近くまで迫り、その子供は悲鳴を上げようとするが、大きな声は出ず小さな声で助けを求めはじめる。

「助け……て……誰か……」

目蓋一杯に涙を抱え、近くに迫ってきている妖怪を見つめながら助けを求めている。

すると、その子の声が聞こえたのか、その子の母親と思われる人が後ろを振り向き、自分の子を助けてくれと叫んだ。

「誰か！誰か、私の子を助けてください！！」

その声を聞いた、アシッド・エースとロックマンは更に前に出、その子供の場所まで行き、すぐ近くに迫っていた妖怪を倒し、子供をすぐさま抱きかかえ母親のもとへ。

子供を渡すと、母親は一度だけアシッド・エースとロックマンに頭を下げ、建物の中へ入っていった。

「アシッド、残りはどれくらいだ？」

《あと半分です。》

「前線にいる隊員の状況は？」

《今のところ負傷者数0です。》

「よし、一気に終わらせる!」

そんな事を目の前にいる妖怪を黙々とデリートしていくロックマンをよそに、話していたアシッド・エース。
アシッドエースは、ロックマンに近づき、話し始める。

「これから一気に終わらせるため、俺たちはもっと前に出るぞ! ロックマン。」

その言葉を聞き、打つのをやめるロックマン。
アシッド・エースの顔を見て、問い返す。

「もっと前に出るんですか?」

「ああそうだ。ファイナライズしたら町のあちこちが壊れるからなだから、もっと前に出て近接系バトルカードで一気にかたをつけるんだ。」

「分かりました。」

そう会話し、顔を見合わせて一度だけ頷きあうと、二人は今いる場所よりももっと前に出て、妖怪たちをデリートし始める。

「てやあ!」

そうして、数十分後その場所は元の平和な状態に戻ったのだった。
そこの妖怪退治が終わり、アシッド・エースとロックマンは隊員に

町の人を任せ、二人別々の場所へ移動していった。

ロックマンが次に移動したのは、ベイサイドシティ。

ミソラーハープ・ノートが担当任せられた場所だ。

ココも他の場所と同じく、人々が声を張り上げ恐怖の声を上げ、走り回っていた。

「ミソラちゃんは?!」

地上に降り立ったその場から、妖怪たちをデリートしつつハープ・ノートを探す。

すると、何処からと無く彼女の声が聞こえてきた。

それと同時に、路地で爆発が起こる。

既に、この場所の妖怪はほとんどデリートされている様子だが、全部倒すまでは安心できない。

ロックマンは爆発が起こったところへ急ぐ。

するとそこには、ハープ・ノートが妖怪を戦っていたのだった。

「キヤー!こつちこないで!」

「ウヴアアアアア!」

そんな風に叫びながら、ハープ・ノートはその妖怪をギターで殴っている。

そのギターになっているハープは、「痛い!!」と悲鳴を上げていた。

そんなことおかまいなしに、殴り続けているハープ・ノート。

目を瞑り、とにかく目の前にいる気持ち悪いものを倒そうと必死だ。周りに他の妖怪の姿は無く、ギターで殴っているハープ・ノートを

見て逃げたのか、それともそんなハーブ・ノートにデリートされたのか、ロックマンは顔に冷や汗を流しながらそんな事を思っていた。

それからしばらくして、ギターで殴り続けられていた妖怪はデリートされた。

ただ、ロックマンは妖怪がギターで殴られデリートされていくのを見ているだけだった。

ハーブ・ノートが我に返り、すぐ側に居たロックマンを見つけ、寄って話しかけてくる。

「あれえ？スバル君いつの間にいたの？」

「えっ？！あつ、いや…その…。」

「おそーーい！！」

「ふえ〜〜〜〜！！」

そんな風にハーブ・ノートからお説教を受けている間に、他の場所も全ての妖怪をデリートし終えていたのだった。

サテラポリスに戻り、シドウがヨイリー博士に報告していく。

結局、妖怪たちの目的が何なのかは分からないままだ。

その日は、そんな騒がしいことで始まり、騒がしいことで終わっていった。

報告が済み、怪我の手当てなどが終わった頃には、既に太陽は山に隠れ、東の空から月が昇ってきていた。

家に帰ったスバルは、疲れ果ててお風呂に入らないまま、自分の部屋にある布団へ入り、眠りに着こうとしていた。

「フア〜〜〜、つ…疲れたよ…。」

《俺だって疲れた…。なんだよ、あの数。》

「本当、そうだね。」

《この俺様をビビらせるとは、なかなかやるなあいつら。》

などと、話していると、隣の家から訳のわからない声が聞こえてくる。

なにやらもめているような声。

スバルは、ベランダに出て隣の家をしてみる。
すると、屋根にある窓に人影が写っていた。

「あれ、天牙ちゃんだよね。」

《だな…。》

「何、もめてるんだろう…。」

《気にすることは無いだろ。さあ、寝ようぜ！もう俺クタクタだ！》

「そうだね、僕もクタクタだし、寝ようっと。」

部屋に戻り窓を閉めて、布団の中に入りスバルは眠りに着くのだった。

そして平和な日々へ（後書き）

更新遅れて本当に本当に申し訳ありません！！！！
スバルを、誰の場所に行かせるか悩んでいました！
で、今日さすがに更新しないとヤバイ！と思い、とにかく考えに考え、書きました！

天牙：それがこの出来か。

はい。

天牙：途中から説明文が短くなってるな。

はい。

天牙：でさ、あのミソラ…じゃなくてハーブ・ノートがギターで妖怪叩くのは、どうかと思うんだが。

少し面白い展開を入れたくて…。

天牙：はあ、本当…っと、めんどくさいから良いや、言わなくて。

…ハア？

天牙：次回は、ほのぼの日常らしいな。

えっ？あつ、はい。

天牙：感想とか評価とかよろしくお願いします。

お願いします。って、セリフ取るな――！！！！

朝食は口に放り込まれる（前書き）

妖怪たちを全て倒したスバルたち、遊撃隊。

サテラポリスまで戻り、手当てを受けて帰った頃には既に夜。

お風呂にも入らないで自分の部屋へ行き、そのまま床に就いたスバル。

隣の家から喧嘩の声が聞こえるが、疲れきっているスバルは気にしないで寝る。

朝食は口に放り込まれる

そうしてスバルは朝を迎えた。

東の空から太陽が昇り、光を照らす。

その光はやがて、当たり全体…いや、自分の目で見える以上に広い範囲を照らし、朝を知らせた。

ベランダの窓から、その光がスバルの部屋を照らし始める。

時刻は午前6:00。

普段なら既に起きている時間。

けれども、スバルは起きない。

ハンターからいつの間にか出て、ベッドと部屋を繋いでいる階段のところで寝ているウォーロックまでもが起きやしない。

疲れ果てて、眠りほうけてしまっている。

それを見ていたアカネは「まだ起こさないでおこう」と思い、ゆっくり起こさないように部屋のドアを閉めた。

太陽が光を照らしている時間といえど、まだ少し薄暗い。

そうして、時間が過ぎた。

時刻は午前8:30。

スバルの部屋で、ウォーロックがスバルを起こす声がある。

《おい！！スバル、起きろ！！これはマジで遅刻するぞ！！》

「ウウン…あと5分だけ…」

《ああー、こうなりや無理やりでも起こさなきゃやばいな。》

そう、ウォーロックは言うど、スバルの真上に行く。

そこから何をするかと思えば、屋根をすり抜けどこかへ消えていく。どうしたのかと思ったその直後、ウォーロックは屋根をものすごい

スピードですり抜け、スバルへ急降下。

見事にそれは直撃し、スバルは見事に目を覚ます。

それと同時に、スバルの体にはとてつもない衝撃が走り始める。

お腹を押さえながら、体を起こすスバル。

目には大粒の涙を浮かべている。

《スバル！！速く着替えて、朝飯食べなきゃ遅刻するぞ！！急げ！！》

「体が痛くて動けない…。」

そんなスバルを、大きな手で取り、とにかく急いで着替えさせるウォーロック。

着替え終わると、次は同じ要領で一階へ行き、いすの上にスバルを乗せる。

机の上に置かれた皿の上に乗せられている朝食のトーストを、スバルの手に持たせる。

そうして速く食べるように促すウォーロック。

だが、体のあちこちがウォーロックの突撃によって痛いスバル、手は動きもしない。

そんな様子を見てイライラしているウォーロックは、驚きの行動に出始めた。

《アアー！さつさと食べ！》

スバルの口の中に、トーストを無理やり詰め込むと、その口に牛乳を流し込み、スバルを片手で持ち上げ、学校へ急いで走った。

もっとも、ウォーロックに走ったという表現があつてるかどうか、定かでない。

なんとか、学校には遅刻ギリギリで登校できた。

それからというスバルは、お腹を押さえながら授業を受けている。
4時間目にはいる前の休み時間。

スバルの様子を見たルナ・ゴンタ・キザマロ・ミソラは、スバルによってくる。

「スバルくん、大丈夫？」

「オイスバル、朝何か悪いもんでも食べたのか？」

「スバル君、しっかりなさい。」

そんな声も虚しく終わるような顔をしているスバル。

「うううん、大丈夫じゃない…ものすごい体中が痛い…」

結局、スバルは保健室へ行くことになった。

当の本人は、ハンターの中で訳のわからない恐怖に取り付かれ、その場から逃げ出したくても逃げ出せない状況だった。

朝食は口に放り込まれる（後書き）

とりあえず終わりつと。

天牙：タイトルどういうことだ。

気にしたら負け。

天牙：ていうか、スバルがウォーロックのなすがままになってるじゃないか。

うん…反省はしてる、けど後悔はしてない。

天牙：お前って奴は…。

今回は、放課後に校門前で誰かと会うという感じ。

天牙：ああ、ウォーロックに突っかかれる。

そんな事無い！

評価or感想よろしくお願いします！

校門前で（前書き）

朝からウォーロックのなすがままになってしまったスバル。
朝食を無理やり口の中に詰め込まれ、そのまま学校へ登校。
3時間目まで何とか授業を受け、保健室へ。

校門前で

廊下をゆっくりゆっくりと歩き、保健室へ向うスバル。
お腹を押さえ、今にも倒れそうな状態。

エレベーターの前まで着く。

ドアが開き、中から先生たちが自分たちの担当する教室へ向って行く。

その間を掻き分け、スバルはエレベーターに乗り、一階にある保健室へ向った。

「うう、痛い…。」

そうエレベーターの中で、小さな声で嘆くスバル。

やった本人はというと、ハンターの中から出ようにも出れない状況にいた。

スバルの顔は体中の痛みによって、若干ゆがんでいる。

ピンポン とエレベーターから音が鳴り、一階に着く。

ドアが開き、スバルはエレベーターから出る。

保健室まで残り、数十メートル。

そんなときだ、ウォーロックがハンターから出てくる。

その太い腕で、スバルの体を支える。

そうして、保健室まで一緒に歩いていった。

保健室のドアを開けて、中に入る。

ガラガラガラ と音が鳴り、その音に気が着いたのか先生がスバルに寄ってくる。

「君、大丈夫そうじゃないけど、大丈夫？」

見れば分かるのに、よく分からないことを質問してくる先生。

それに対してスバルは、苦しそうな顔と声で答える。

「大丈夫じゃ…ない…です、ものすごく…体が…痛いです…。」

スバルのその言葉を聞いた、先生はスバルをベットまで連れて行き横にさせる。

「しばらく横になって寝て居れば大丈夫だろ思うけど…。とにかく4時間目は受けれないわね、担当の先生に伝えておくわ。えっと、お名前とクラスは？」

「5年…A組の…星河…です。」

それを聞くと先生は、保健室を出てスバルの担任の先生がいる場所へ向っていった。

保健室には、スバルとウォーロックだけが残る。

廊下では他の学年・クラスの生徒たちが、楽しく遊んでいる。

ベッドは窓際にあり、その窓から外を見ると、運動場が見える。

それを眺めながら、スバルは体の痛みに耐えていた。

その側でウォーロックはいつ自分のせいかとばれるのを、怯えていた。

そうこうして、4時間目が始まるチャイムが校舎内に響く。

廊下が一瞬にして静かになる。

静かでゆっくりとした時間が保健室に流れていく。

以前として、スバルはお腹を抱え痛みと戦っている。

少したち、スバルが体を起こす。

顔はまだ痛いという表情をしているが、少しマシになったよう。

《オイスバル、大丈夫なのか。》

「ちょっとだけね…まだ痛いよ。」

《ト…トイレか?》

「違うよ、ただ体起こしただけ。」

《そ…そうか。》

そうして…また時間は流れていった。

4時間目が終わり給食の時間となる。

スバルは、なんとか教室に上げられるまで回復し、ルナたちと一緒に食べることにする。

「スバル君、本当に大丈夫なの?」

「まあ、何とか大丈夫。」

ミソラ・ルナ・ゴンタ・キザマロと一緒に仲良く、いつものように給食を食べる。

こうして、時間は流れ、放課後になっていった。

夕日が山に隠れ、あたりが少し暗くなっている。

いつものようにスバルたちは一緒に校舎から出て、いつものように帰路へつく。

校門まで着いたその時だった。

「おっ、隣の星河さんとこの…。」

スバルの話しかけてきたのは、隣にすんでいる天牙だった。

校門前に肩に持っている荷物を乗せ、塀にもたれかかった状態でスバルに話しかけてきた。

「どうも、天牙さん。」

「スバル君だっけ？」

「はい。」

「こんな時間まで何してたんだい？」

「いや…保健室でちよつと…」

「そかそか。」

二人仲良く話している天牙とスバル。

二人の顔には少しの笑みと笑顔が見えている。

そんな二人を見て少々ご機嫌斜めになる、ミソラとルナ。
羨ましい顔で、スバルを見る。

だが、そんな視線を無視してスバルは天牙と話していく。

「天牙さんは、なんで校門前にいるんですか？」

「ん？ああ、友達待ちつてやつだよ。」

「友達？」

「ああ、同級のね。」

すると、校舎の方から誰かが名前を呼びながら走ってくる。
その声は、女の人で「天牙ー！」と呼んでいる。

「由璃遅い。」

「ごめ〜ん！先生から色々頼まれてさ〜。」

「まあいいや。そんじゃな！スバル！」

そう言つて、天牙は友達の出璃と一緒に帰っていった。

天牙が見えなくなると、ルナとミソラの顔はいつもどおりに戻る。そして、スバルに声を合わせて質問を始める。

「スバル君、あの子誰なの？」

「えっ？隣の家ですんでる子だけど〜。」

「名前は？」

「翼妖天牙よくようてんがって言うみたいだよ〜。って、何でそんな二人して怖い顔してるの…？」

「そ…それは…。」

ルナとミソラは一度顔を見合わせ、顔を赤らめてスバルに思いっきり言葉をぶつけた。

「スバル君が見知らぬ女の子と普通に喋ってるのが、う…うらやまし…羨ましかっただけだよ！！」「」

そうして、二人はその場から颯爽と去っていった。

スバルは「僕、なにか悪い事した？」という顔をしている。

こうして、スバルはその日の学校を終えたのだった。

校門前で（後書き）

今日はこれぐらいで勘弁してください。

天牙：たつくだらないな。

由璃：まあまあ、天牙！そう言ってあげないでよ。

天牙：由璃、こいつには優しさなんてものは必要無いよ。

由璃：そういう天牙もたまに優しくしてるじゃないの。

天牙：うぐう。

百合みたいなフラグが立った気がするけど、この二人は友達であつて決してry。

―数分後―

天牙：てわけで、次回は？

次回は、色々。

由璃：いつもどおりですね。

評価or感想のほど、よろしくお願いします！

（次回は、感想の方にかかれてたミソラたちの精神状態などを…っ
て感じ。）

旬のものはおいしいものだ（前書き）

なんとか回復し、復帰することの出来たスバル。

委員長たちと仲良く給食を食べ、授業を受け、その日の学校を終えた。

放課後には校門前で天牙とあったり、平和な一日だった。

そうして、人々は夜をむかえ眠りに着き、新しい一日を迎えるのであった。

旬のものはおいしいものだ

緑の葉が、少しずつ橙色に変わっている外。

虫たちは、土の中に入るために色々な準備の最中。

人々は、寒い季節に向けて色々準備。

そんなある日の朝、家々からは良い秋の食の匂いが漂っていた。
そんな匂いに導かれるかのように、スバルは目を覚ます。

「良い匂い……。」

《スバル、目覚めたか。》

「おはよう、ウォーロック。」

《おう、おはよう。》

清々しい朝。

太陽は既に東の山から顔を出して、空に浮かんでいる。
スバルは普段着に着替え、下に下りていく。

「母さんおはよう。」

「おはようスバル。朝ごはん出来てるから、チャッチャと食べちゃいなさい。」

この日の星河家の朝食は、秋の旬がたっぷり詰め込まれたサンドイッチ。

スバルの嫌いなニンジンも少しだけ入っている様だ。

そんな嫌いなものが入っていることなんか知らないまま、寝ぼけて

いる状態でサンドイッチを口の中へ。
一口噛み千切り、そのまま食べていく。

「あら、嫌いなニンジン食べたのね。」

そんな風に、アカネがスバルに笑いながら話す。
その言葉で目がバッチリ覚めたのか、スバルはアカネに問う。

「母さん、ニンジン入れてたの！！」

「ええ、ちよつと悪戯だね　まあ、ちゃんと食べてくれたようだし、良かったわ。」

まんまとアカネの悪戯に嵌ったスバル。
既にニンジンがスバルの胃の中だ。

ニンジンが入っているのを言われ、少し食べるのが嫌になるスバル。
一口食べただけのサンドイッチを手に持ったまま、食べるかどうか悩んでいる。

そのままの状態で5分、スバルはサンドイッチと睨めっこをしながら悩んだ。

勇気を振り絞り、スバルはもう一口サンドイッチを食べる。

「…おいしい。」

こうして、スバルはアカネの小さな朝の悪戯によって、嫌いなニンジン克服することが出来たのだった。

朝食を食べ、スバルはぶらりぶらりと散歩に行くことにする。
玄関を出て、ぶらぶらコダマタウンを歩く二人。

「たつく…母さんめ…。」

「まあいいじゃねーか。それに、お前おいしそうに食べてたぞ、なんだかんた言いながら。」

「だって、そんな感触一切無かったんだよ？なのに、母さんったら「ニンジン食べたのね」なんて言ってるさ。」

「まあ、オフクロの努力が実ったって事だ。あのあと、ちゃんと他のやつも食えたじゃねーか。」

「おいしかったんだもん。」

こうして朝の散歩は賑やかに始まって、賑やかに終わった。家に帰宅後、スバルは学校から出された宿題に手をつけ始める。

こうなるとウォーロックはいつもどおり、暇で暇で仕方が無く電波世界へ飛び出しウィルスの相手をしている。

シャーペンを持ったスバルの手は、スラスラと問題を解いていく。そうして、しばらく時間は過ぎていく。

お昼の12時に10分前、スバルの手が不意に止まる。

「ああ、この問題どう解くんだっけ…？」

どうやら、途中に出されている問題が分からない様子。

頭をフル回転させ、問題の答えを考えている。

そんなところに、不意にスバルのハンターから電話の音が鳴る。着信音はミソラの「シューティング・スター」だ。

「んんん、こんな時に誰だろう。」

机の上の隅においてあったハンターを取り、電話の画面を出す。

画面に映っていたのは…。

「あれ、委員長どうしたの？」

『どうしたじゃないわ、ただ電話してみただけよ。』

「えっと…何か用？」

『相談に乗ってほしいの、今から私の家に来てくれない？』

「宿題…持っていて良いかな？」

『なによ、まだ終わってないの？』

「だって、昨日とっても疲れてたんだもん。」

『それなら仕方が無いわね、良いわ持ってきて良いわよ、教えてあげるから。ただし！今すぐ来なさいよ！！』

そう言つて、ルナは電話を切った。

スバルはルナの家に行く準備をする。

何を持っていけば良いか分からないので、ハンターと宿題を小さなバッグに入れる。

そうして、スバルはルナの家に向けて家を出た。

旬のものはおいしいものだ（後書き）

更新できたーーーー！！

天牙：お疲れさん。この調子で遅れた分取替えせよ。

おうさ。

天牙：にしても、いやぁスバルナ要素が見事に入ったな。

うん、これは見事な入りよう。

天牙：さて、次回は？

もう決まっておるでしょうが。

今回はルナがスバルに色々お悩みを相談するのだよ。

そしてその次は、サテラポリスで色々…かな。

天牙：って感じらしい。

評価or感想のほう、よろしくおねがいします！！

甘い甘いお茶の匂いに誘われて（前書き）

いつもどおり起きて、着替えて一階に下りて朝食を食べるスバル。朝食のサンドイッチには嫌いなニンジンが…！

けれども、それを克服しスバルは散歩へ。

帰宅後は宿題に集中。

宿題をやっていると、ルナから相談の電話が来る。

スバルはルナの家へ行くことに。

甘い甘いお茶の匂いに誘われて

家を出たスバル。

道のふちに生えている木の葉は、ほとんどが橙色に変わっていつている。

秋を身近に感じ取れる外を歩いて、ルナの家までゆっくり歩いている。

のんびりとした時間が流れている。

《おいスバル、あれなんだ？》

そういったウォーロックの指が指しているのは、木の枝からぶら下がっている何か。

スバルはその木に近づき、何かを確認する。

「これはミノムシだよ。」

《ミノムシ？なんだそりゃ。》

ミノムシが何か分からないウォーロックに、ミノムシがどういうものかを自信なさげに説明するスバル。

その説明で分かったのか、ウォーロックは枝からぶら下がっているミノムシを指で数回軽く突つついた。

つつかれたミノムシは、プラプラして動揺していない様子。

《動かないな。》

「まあ、そりゃね。もう冬眠してるんだと思うよ。」

《面白くないな。》

そんな冗談を交えながら、スバルはルナの家へ急いだ。スバルの家から、徒歩数分のところにあるマンション。

マンションの敷地内には少しばかり大きなプールまで完備されていて、豪華なマンションである。

そんなプールは、季節が秋だから使われていないようで、散った葉が水面に浮かんでいる。

外見は灰色のような銀のような色で、とても綺麗だ。

「ふう、着いた〜。」

マンション前まで来たスバル。

オートロックは予めルナが開けていたようで、エントランスのドアは普通に開けることができた。

ココからさらに、階段を上らなければならない。

ルナのすんでいる部屋は、5階の505の部屋。

「エレベーター無いのかな…？」

《無いみたいだな、ほらさっさと上がるぞ〜。》

階段の一段目に右足をあげる。

そこから一段一段ゆつくりと、あがっていく。

少しして、ようやくルナのすんでいる部屋の前に着く。

「着いた〜。」

ドアが開き、中からルナが出てくる。

「遅いわよ!」

「階段長いんだもん!」

「エレベーターあるはずよ。」

「…ええ!」

「まあ、いいわ。さっ、早く中に入って。」

そうルナに言われて、中に入るスバル。

いつもどおり綺麗に掃除されている。

リビングとルナの両親の寝室の間にある廊下を抜け、ルナの部屋へ行く。

ルナの部屋には、いくつものトロフィーや人形が飾られてある。

いつもと違うのは、部屋の真ん中に小さな机が置かれてあるぐらい。それ以外は何ら変わることは無い。

「今お茶入れてくるから、座って待っててちょうだい。」

そういうと、ルナは台所のほうへ行ってしまう。

ルナの部屋にひとり残されたスバルは、とりあえずバッグから宿題と筆箱を取り出し分らない問題の答えを必死に考え始めた。

顔をゆがませながら、再び宿題と睨めあい。

スバルの手の中で、シャーペンが今にも折れそうな勢いで、悲鳴をあげている!

そんなシャーペンを見捨て、ひたすら宿題とにらめあうスバル。

それから5分後、ようやくルナが自分の部屋にお茶をお盆の上に乗せて戻ってくる。

「お茶が出来たわ、さあ相談に…って、どうしたのスバル君！」

部屋に入ったルナは驚きの顔を隠せないでいた。

というのも、宿題とにらみ合っていたスバルが床に倒れているのだ。

「だらしないわね、大丈夫？」

「いや…大丈夫じゃない…です。」

「たつく…まあ、お茶が出来たからゆつくり休んでちょうだい。」

「そうするよ…。」

そういうとスバルは起き上がり、ルナが作ってくれたお茶を飲むのだった。

しばらくして、スバルの気力が回復する。

宿題の分らないところを、ルナに丁寧に教えてもらったスバル。

スバルがルナの家に来て、20分。

悩みに悩んで解いていって宿題は、ルナの手助けによって終わりを告げた。

「ねえ、スバル君。」

「ん？どうしたの？」

「相談…乗ってもらって良い？」

甘い甘いお茶の匂いに誘われて（後書き）

中途半端だが、ココで終わり！

天牙：次の更新はあれか？ルナがスバルに相談するのか？

はい。

尺の予定が狂いに狂って、相談の方は次になった。

天牙：にしてもあれだな。メモ帳に、昨日の書きかけを保存しておいて良かったな。

本当、つくづくそう思うよ。

天牙：次回は、言ったとおりだ。

今度こそ、ルナがスバルに相談する。

評価or感想のほど、よろしくおねがいします！

月の心（前書き）

無事、ルナの家に着したスバル。

家の中に入り、早速宿題に取り掛かる。

ルナに手伝ってもらい、なんとか宿題は終わる。

そして、ルナはスバルに相談に乗ってもらうことに…。

月の心

「で、相談ってどういう内容？」

二人は向かい合い、話す。

机の上には、二つのコップに注がれたお茶が白い湯気をたてている。

「この間あったことよ。」

「この間…っていつ？」

「ほら、この間あったあの不気味な物体の…。」

スバルはルナのその言葉でようやく「この間の」の意味が分かる。

そう、あの日だ。

妖怪たちが地下から不気味な声を張り上げ、地上に上がってきたあの日。

そして、這い上がってきた妖怪たちは不気味な言葉を言いながら人々を襲った日。

遊撃隊の皆が、日本各地へ飛び、妖怪退治をした。

そしてその日、スバルはルナの一言によって、なんとかコダマタウンに現れた妖怪を全てデリートすることが出来た。

スバルは、そのことに関してルナに感謝している。

そんな日も今は過ぎて、平和だと言うのにどこかルナの顔は怯えているような表情をしている。

「あの日が、どうかしたの？」

「どうかしたのじゃないわよ！」

怒鳴るルナ。

その顔はやはり、何かを恐れ怯えている。

「あの日のことがトラウマになっちゃって、今の怖くて寝れないのよ。」

トラウマ、それは誰しも心に一つは持っていると思われる恐怖のモノ。

それがとれなく、大変なことになることも、しばしばあったりするのだ。

ルナがまさに今、そんな状況下にある。

スバルはルナの顔をチラツと見る。

軽く化粧をして隠しているようだが、目の下には少しクマが見えている。

「だから、何とかしてほしいのだけど…。」

どう返答すれば悩むスバル。

そんな間にも、時間は流れていく。

ベランダの鉄格子には小さな鳥が2羽止まり、お互いを見詰め合っている。

既にコダマタウンは秋になり、窓から見える空き地には赤い色をした彼岸花が、綺麗に咲き乱れている。

誰もが知っている秋の魅力、それが次々と外で芽吹いている中、まだスバルは悩んでいた。

トラウマの解決法など知るはずが無いからだ。

とにかく、頭の中に浮かんできた言葉で答えることにするスバル。

「そのことを忘れるとか…。」

そのことをスバルが言った瞬間、ルナは激怒する。
そして、声を上げスバルに少し怒鳴りつける。

「そんな簡単に忘れられるものだったら、スバル君に相談して無いわよ！」

「そうだよね…ごめん。」

結局、そのまま何も案が出ないまましばらく時間は過ぎていく。
すっかり紅茶は冷えてしまい、飲む気が失せてしまったのだった。
紅茶は冷えたが、スバルとルナ、二人はお互いに顔を歪ませ悩み、
トラウマの解決法を探している。

妖怪という奇妙な生き物を見た瞬間に出来てしまったトラウマ。
おそらく、あれを見た全ての人が抱えている難題だろう。
たった二人で、その難題を解けるものだろうか。

ハンターの中ではひっそりとモードが、トラウマの解決法を検索して
いたりするのだが、ウォーロックは暢気に昼寝をしている。
外から聞こえるのは、鳥の鳴き声と草木が風によってこすれあつて
いる音だけ。

とても静かな時間が流れている。

「悩むだけ無駄かしら…。」

顔を少し横に傾けて左手で顔を支えながら、「はあ」とため息をつ
くルナ。

目は半開き、どうやら諦めたようだ。

「ごめん、何も出来なくて。」

何も出来なかったことを謝るスバル。

「いや、スバル君は何もしてたくないわ。色々考えてくれたじゃない。それだけで十分だわ、ありがとうね。」

「それなら良いけど…。」

そしてまた静かな時間が訪れる。

何も答えは出ないまま、このままお開きになるかと思われた。スバルはとりあえず荷物を右手に持って立ち上がる。

「それじゃあ、僕もう帰るね。」

そして、そのまま廊下の方向へ向ってゆっくり歩き始めた。

後ろでは何か話を切り出そうとソワソワしているルナ。

座ったまま顔を赤くして、口をパクパクしている。

そうしている間にも、スバルは廊下へ一歩一歩近づいている。

目を瞑り、ルナは自分に心の中で話しかける。

（私ったら、何をしてるのよ！速く言わなきゃ、スバル君が帰っちゃうじゃない！）

そう自分に言い聞かせ、バツ！と勢いよく立ち上がる。

そして、目を瞑ったまま、話を切り出す。

「あ…あのね！」

その言葉を言いながら、目を開けて前を見る。

しかし、そこには「居る」と思っていたスバルは居らず、誰もいな

いのだった。

焦ってルナは、廊下に出る。

ルナが思った一瞬のこの通り、スバルは既に廊下に居た。

ルナの声にも気がつかないまま、リビングの前を通り過ぎようとしている。

そして、ルナは言葉を出そうとする。

けれども、またその言葉は口から出ない。

（もう！何で肝心なときに出ないのよ！）

そうしている間に、スバルは玄関に近づいている。

ルナはものすごい速度で、何故言葉が出ないのか原因を考えた。

おかしくなるほどのスピードで、同じ言葉を頭の中でめぐらせ、同じ答えにたどり着く。

最終的には、その答えさえも分からなくなっていた。

手と顔に汗がにじみ出る。

「せつかくした薄化粧が台無し」なんてことも、頭の中に一瞬浮かんだ。

気がつけば、体中から汗が吹き出ているのだった。

そして、ルナは全てを忘れ、我をも忘れ、意を決して言葉を出した。

「ス…スバル君！」

両手を握り締め両目を瞑り、顔を下に向けて振り向いてくれていることを願う。

それから少し時間が経ってから、ルナは目を開けて目の前を見る。

すると、そこにはスバルがルナを少し遠くから見つけるような状態で、振り向いてくれていた。

ルナの胸は、さらに高鳴り始める。

心臓の鼓動が速くなっていく。

そして、再び顔を下に向けてしまう。

「どうしたの委員長？」

狭い廊下、スバルの委員長を心配する声が壁を伝いながら廊下中に
少しだけ響く。

心配してくれている、それだけで嬉しいルナ。

言いたいことを言う、いや言わなければならない。

そう決めたルナは、再び顔を上げ前を見た。

すると、少し前にはリビングの角を曲がればすぐ玄関というところ
に居たスバルが、ルナの目の前に居たのだ。

その瞬間、ルナの胸の高鳴りはさらに高鳴り始める。

顔の赤さも、熱があるのではないかというほどになり、ルナの中で
は感情がピークに達しているのだ。

スバルは、そんなルナを心配して、さらに顔を近づけてくる。

これだけでもう十分なルナ、けれども「思いは伝えるべき」と心に
決めている。

時間はこうしている間にも、少しずつ流れていく。

気がつけば、窓の外に浮かんである太陽は既に山に隠れ始めていた。
そして…次の瞬間、ルナは思い切って行動に出た。

自分の両手をスバルの腰に、勢いよく廻す。

そしてその手でスバルの体を、思いっきり自分の体にくっつけた。

もちろん、このようなことをされたスバルは、いきなりのことです
頭の中は混乱している。

そんな中で、ルナは今まで言いたくても言えなかった言葉を、告
げた。

「…少しだけ、このままで居て…。」

「分かってる、分かってるよ…委員長。僕も、今ほんの少しだけこ

のままで居たいから……。」

そんな二人を邪魔しないように、ハンターの中に居る二人はそっと外へ出ていった。

それから数分後、スバルは自宅に帰っていった。

家に帰ったスバル。

晩御飯のときに母のアカネに

「スバル、なんかお昼から委員長さんの家に行ってから嬉しそうじゃない。」

という言葉と言われたのは、間違いないだろう。

こうして、太陽は山に隠れ、月が東の空から登り、一日を終えたのだった。

月の心（後書き）

とつても久々の更新で、申し訳ないです！

昨日の夜、親に許可をいただいて夜中の22時30分頃から23時頃までPCをして、なんとか終わらせました！

誤字等見つけたら、感想ついでに教えていただけると嬉しいです。
更新頻度、上げていけるように日々精進しようと思います。

他の流星二次を書かれてる方に追いつけるよう頑張ります！

天牙：んで、次は？

次は、妖怪さんたちがどーのこーの話し合ってるゝとかそんな感じかな。

実は未定だったりするけど、悪役さんたちを登場させようとは思う。

天牙：というわけだ、感想or評価の方よろしくおねがいな。

彼らの楽しみ（前書き）

時間は少し経ち、月の光が辺り照らす夜になる。

サラリーマンなどの一部の人を除き、大体の人は眠りにについている時間。

そんな時間、あの奴らは何をしているのか。

彼らの楽しみ

人は眠りに着き、静寂に包まれた夜の世界。

街は、信号の光と車の光と残業をしている人のいるビルの光で、少し明るく照らされている。

街には夜といえど、大人たちが街を歩き、店に入って酒を飲み、今日一日の愚痴を楽しく酔いもらしている。

そんな楽しい街中と比べて、とても暗い山の中にある村。

所々にある街灯が小さく光って、夜道を照らしているだけで、街中のように人は歩いておらず、静寂の中。

タヌキなどの小動物が、人影の無い道を親子でトテトテと歩いて、エサを求めて彷徨う。

空にはコウモリが、暗闇にまぎれて舞う。

そんな夜、都心の街から離れた場所にある、とある山。

標高は500mから600m近くあるだろう。

山頂へ行くための山道も山頂も荒れ果て、長い時間整備すらされていない。

同じように山頂へ行くためのリフトも錆びてしまい、動く様子もない。

そんな山頂に、ひっそりと一つ建っている古びた大きな寺院。

寺院の中には人の気配は一切無く、床の木を突き抜けて草が所々に生えてしまっている。

名前も存在も忘れ去られ、荒れ果てた山。

そんなところに、怪しげな声が急に聞こえ始めた。

軽快な笑い声、その笑い声は酒を飲み酔ったような声だ。

少して、その笑い声は二つ重なる。

どちらも、酒を飲み酔っているようだ。

そんな二人のうち、一人が向いにいるもう一人に話し始めた。

「まあ、それにしても久々じゃな。」

その言葉に対し、向かいに居る彼は言葉を返す。

「本当にそうだな。何百年ぶりに顔を合わせたか。」

顔を少し赤らめて酔ってはいるものの、酔ったそぶりの無いような口調で話す相手。

そんな相手の言葉に対し、相手よりも酔った様子の彼は言葉を返す。

「そうだな、えっと、500年か600年ぶりじゃないか？
貴方たちが眠りに着いたのがたしか、江戸時代の終わりごろだった気がするからの。」

「300年ぐらいか、そんなに長い間眠ってたんだな、俺等は。」

相手は彼の間違いを見事にスルーして、眠っていた年数を言った。

「ワシは、ずっと地上に居たがの。」

「お前は特別だろ、大天狗よお。」

「まあそうじゃな。ヒックエ……」

お酒を酌み交わしながらの楽しそうな様子の会話。

その会話の様子から大天狗の方は、既にかなり酔っているようだ。
相手は、まだまだ余裕のよう。

「にしても大天狗よお。」

相手が、大天狗に話しかける。

「なんだあ？」

「お前の連れてきたそっちの女の烏天狗は、酒は飲まないのかい？」

そう言つて、相手は自分の斜めにいる女の烏天狗を指差す。

大天狗と相手が、指を差した先にいる女の烏天狗を見る。

それに気がついた女の烏天狗は、正座をしたまま水の入った杯を地面に置き、相手の質問に答える。

「私はまだ未成年なので、お酒は飲んじゃだめなのですよね。」

それに対し、相手は。

「そりゃあ、お気の毒だな。…つて、お前さんは妖怪だろ？ 妖怪に未成年なんて関係ないと思うんだが。」

と言つ。

女の鴉天狗のほうは、少々困つた顔で相手の言葉に返答をする。

「まあ仰るとおり、私は妖怪なんですけど…。ちよつと事情があつて、人間でもあるんですわ。」

その言葉に対して、相手はまたも軽い口調で答える。
しかも今度は、お酒を飲みながら。

「ああ、そうか、なるほどな。そりゃ大変だろ？人間でもなきやいけないし、妖怪でもなきやいけないなんて。」

「ええ、もうそりや大変ですよ。5年前ぐらいから小学3年の2学期ごろまで、それがばれた感じで虐められましたからね。」

「たつく…人間は身勝手な奴らだな、あいかわらず。」

「まあ、そんな人間たちですが、一人だけ優しい友達が出来ましたけど。」

「そりや、めでたい。」

二人は大天狗そっちのけで話をした。

女の烏天狗の悩みを聞いてあげる程度ではあるが…。

そうして、時間が流れる。

既に日付は変わっていた。

まだ空は暗いが、後数時間もすれば太陽が東の空から昇ってくるだろう。

相手は、また大天狗に質問を投げかけた。

「ああ、大天狗。そういやさ、この子の名前は何って言うんだ？聞いてなかったが。」

相手は、もう顔が真っ赤で、今立つとフラフラして最終的には倒れてしまうぐらい酔った大天狗に話しかける。

「んああ、この子の名前はなあ。うえつくう。」

そんな大天狗の話し方を見て、相手は少し哀れむ。

「たつく、この大天狗は本当に酔うの速いな。」

そんな風に相手は言う。

けれども、既に酒瓶4本は軽く開けている。

普通の人間であれば、酔い潰れているだろう。

いや、酔い潰れるどころか、おそらく病院に運ばれているかもしれない。

なのに、相手はまったく酔ったそぶりが無く、普通に話している。

「ああもう、大天狗様つたら…。」

女の烏天狗が、大天狗のそんな様子を見て少し心配する。

「ははっ、そいつはほっておいても大丈夫だ。明日にや、酔いは醒^さめるからな。」

「だとしても…。」

そう、少し困り顔で言う女の烏天狗。

そんな彼女を気持ちなど知りもしないで、大天狗は地面に大の字で横たわり、いびきをかきながら寝始めている。

二人は、肩を落とし呆れ顔でため息をつく。

それから少しして、二人はお互いの顔を見た。

「で、お前さん…名前は？」

「えっ…あつ、えつと…。」

少し間ができる。

相手はその間にも、酒瓶を手に取り杯に酒を入れて飲んでいる。

「そうですね。私の名前は、フェザー・コーヴァスとでも言っておきます。」

「分かった。まあ、ということはあれか、今流行の…。」

何かを悟ったかのような顔をして、相手はそこで言葉を止める。そして、また話し始める。

「まあ、仲良くやっていこうな。」

「もちろんです。大天狗様のお知り合いの妖怪となれば、もちろんのことです。」

それに、貴方様は見たところ鬼のようですし、話を聞いていれば昔から我々天狗とも仲が良いようですからね。」

地面に置いていた水の入った杯を再び手に持って、フェザー・コーヴァスは相手に言う。

すると、相手は笑いながらフェザー・コーヴァスをほめてきた。

「ハハハ！その観察力鋭いな。言われたとおり、俺たち鬼は、大昔から天狗たちとは仲が良かったな。」

今は皆起きたばかりで寝ぼけてるのか、何処かの山の中や寺院の中で寝てるがな。」

「本当、愉快ですね。」

「妖怪なんてそんなものさ。酒を飲み、人を襲い驚かせる、時には食べたり助けたりとな。自由気ままに生きててこそが俺たち妖怪だからな。」

鬼の大きな笑い声が、静かな闇の中に響く。

日付が変わってから、既に1時間がたっている。

夜の10時ごろからだろう、ずっと飲み続けていた大天狗は完全に夢の中へ入ってしまったている。

鬼のほうはまだ余裕の表情。

10分で一瓶開け、6本目に突入していた。

「さて…と。」

地面に杯を置き、ゆっくり立ち上がるフェザー・コーヴァス。

その顔にはほんの少しだけ疲れが見えている。

酒を飲み続けている鬼。

フェザー・コーヴァスが立ち上がったのに気がついたのか、そちらのほうを見る。

そして、不思議そうな顔をして話し始める。

「どうしたんだい？」

「人間って、朝早く起きなきゃいけないですよ。忙しいもんですよ。」

と、なにやらわけの分らないことを言ってくる。

だが、言葉の意味が分かった鬼は

「ああ、そうか。そりゃ忙しいものだ。急いで家に帰って、ゆつくり寝な。また一緒にのんびり出来ると良いが…。本当、お前さんは忙しそうだな。」

と返す。

「ええ、忙しいものですよ。それでは、またいつか。」

「おう、またな。」

風のように消えていったフェザー・コーヴァスに、そう言った鬼。一人残ったその場で、何をするか酒を飲みながら考える。そうしているうちに、時間は過ぎて朝になっていく。

「妖怪は夜に活きるもんだ。あいつは、忙しいもんだよ。運命って奴は残酷なもんだ。」

そんな事を言った鬼。すると、目の前で大の字で寝ている大天狗が、わけのわからない寝言を言い始める。

「こいつは本当に愉快な寝言だ。俺たち妖怪が何で復活したかは分からんが…まあ、昔と同じようにのんびりするだけさ。」

そうして、また杯に酒を入れ飲む。

明けていく夜を見ながら、鬼は愉快に酒を飲みながら、何かを考えていた。

彼らの楽しみ（後書き）

久々の投稿！

今回初登場の妖怪は、鬼です！

設定上…鬼は天狗と仲が良いと言っていることになっています。

これは、分かる方もいらっしやるでしょうが、東〇のを少々取り入れている感じです。

これから、新しい妖怪なんかを登場させていきたいですよ。

スバル：そのためには、早く更新しなきゃね。

本当、そのとおりだよね。

私の体調と、やる気さえ良ければ早くできるんだろうけど…。

ルナ：体調調整えればどうなのかしら…？

しばらく更新停止にして…。

委員長…、それは無いですよ…。

続きを楽しみにしてくれてる人がいるかもしれませんから。

ウォーロック：で、次回はなんだ？

次回はまだ未定だよ。

まあ、スバルたちの日常に戻るのには間違いないけど。

スバル：感想と評価、どちらでも良いのでよろしくお願いします！
って作者さんが言ってるよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1141v/>

流星のロックマン ～忘れ去られたモノ達～

2011年11月5日11時08分発行